

尾崎喜八資料

第 13 号

一つの想像／尾崎喜八	2
エッセイ及び放送対談／尾崎喜八	3
山荘の灯	
五月の中央線	
上高地	
対談 「詩のこころ」	7
尾崎喜八への旅 補遺 一／伊藤海彦	13
研究と資料	
重本恵津子著『花咲ける孤独』を読んで／藤沼 貴	15
尾崎喜八落款印／山本陽一	24
詩「美ヶ原熔岩台地」の校異と特質／嘉納忠明	26
尾崎喜八とフランスの作家たち その一／中原好文	31
研究会だより／尾崎栄子	
尾崎喜八文庫について	35
インターネットのホームページ「尾崎喜八の世界」札幌に開設	37
尾崎喜八の愛用したオルガン	38
ヘルマン・ヘッセと尾崎喜八を結ぶ糸	39
尾崎喜八著作総目録製作に着手	39
*	
平成八、九年のできごと／編集後記	39 / 40
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会

1997年12月

一つの想像

着陸船イーグルの二人の乗員、地球人代表者のその一人、アームストロングがまず彼の左の足から月面の「静かの海」の荒寥たる一角、人類未踏の天体の土にがっかりと下り立つ。

星条旗、地震計、反射鏡その他の据え付け、

隕石や火山弾や岩石や土砂の採集、

その間にも撮影、観察、記録の作製。

二人のために時間は作業でぎっしりと詰まっている。

三十八万四千キロという暗黒の宇宙のかなたに三分ノ一ほど欠けた地球の色や姿は美しいが、それをうつとりと眺めているにしてはあまりに凝縮された時間と、人間界からの孤絶の境地だ。

せめて生ある物の証拠でもと探してみるが、鋭い視線にもそれらしい物は映らず、

ただ時々護衛飛行中の母船コロンビアとそれを操縦しているもう一人の同僚の事が思われる。折のもの

昭和四十一年二月

ラジオ番組「自然と共に」
取材の為知多半島に行つた
折のもの



エツセイ及び放送対談

山莊の灯

あの時の感動は今思ってもほほえましい。心が子供のように浮々と花やぎ、生活にいつそうの張り合いが感じられ、夕暮の来るのが優しく待たれ、充実した夜を持つことが嬉しかった。

戦争で東京の家を焼かれて、家族をつれて移つて行つた信州富士見高原の片隅の、或る大きな森の中の山荘に、一年目でようやく電灯がつくようになった時のことである。

小さい黄ばんだ光の下に、夜のだんらんも仕事も碌にできず、ふくろうやむささびの鳴く森の家で、いつも早寝をしてしまったその一年後だった。

家じゅう到る処に新らしい可能を秘めた光源が取りつけられ、「開け、胡麻！」のスイッチを入れると忽ち夜が昼間になる。思えば生活の驚くべき革新、暗くしほんでいた思想の再びの開花だった。私の詩人の仕事がにわか

に豊かになり、妻に夜なべの張り合いが生れ、いさきかの文化が山の生活をいとど楽しい、いとど美しい予感で満たした。

八ヶ岳や釜無の山々に暮色の迫る頃、自分の森の山荘に花のようなく、天体のような電灯の輝き出す事を考えると、よく生きなければならぬ生活が、ここに又楽しくも延ばされた事を私は実感したのだつた。

(推敲の跡ある自筆原稿 島根県太田明夫氏寄贈
卷頭に「日立」新年号送り11・15とあり。)

五月の中央線

(新宿) 岡谷

中央沿線の空の下

別する事のできるものがあるせいかとも思われる。

いずれにしてもお互に気安く乗れ、終始気持よく旅のできる事が何よりである。われわれの平らかな平常心が乱されず、それゆえ乱される事にあらかじめ備える必要もなく、水成岩の国から火成岩の国、幼年や壮年の地貌を見せた山地・渓谷・湖底平野、そのあいだに点々と絵のような山村や町や、又稀には都市の大きな横たわりを指摘しながら、これら窓外に変化をつくす遠近の風景をのんびりと眺めたり、静かな瞑想や好奇の眼で迎え見送ることがなんと楽しいだろう。

そして此の自然や風景や人間生活の諸景観

れば私を呼び寄せてやまないからである。

登山や旅の好季節に、とりわけ列車のはげしく込みあうのは大体どこでも同じ事だが、それでも新宿駅は乗りよい起点の第一位ではないかと思う。此処では旅客の整理の仕方や

に時々の色を添え抑揚をあたえるのは、整々とめぐる季節の仕事であるが、私は中央線の旅でもやはり春と秋とを最適の候と思い、とりわけ晩春五月のそれを讃美せすにはいられないものである。

旅窓にみる植物

雲雀が歌い水のきらめく武藏野西辺の五月の春を、紫の重い濛氣でメランコリックにしている立川、八王子。しかし浅川を出ればすでに早くも山地である。先ず上長房のあたりで最初の短かいトンネルを抜けて、左の窓に高尾山の黒木の尾根を見上げるあたりから、単線上を千分の二十五の勾配で引きずられるながら登つてゆく車輪の響といい、新緑の山にこだまする電気機関車の複音の警笛といい、車掌の真赤な腕章といい、気のせいか列車はそろそろ中央線の旅の気分を出し初めで来る。

そしてもう梅も青葉の小仏部落と大括弧のようないい小仏トンネル。行く心にはいつも前途の期待にみちた轟々たる序曲であるが、帰る時には、(これは私情に過ぎまいが)、何かひどく惜しまれる既往との別れの関所である。

相模湖や石老山、或は陣馬・景信あたりへの遠足や遊山のために与瀬で下車する人達を、さのみ羨ましく思わないでいられるのも、今日はこちらがもつと遠い、もつと清明な空の下へ行くのだからであろう。そうでなければ私にしてもこんな朝を、津久井の谷を対岸へ、臥牛のような石老山に登つて、まのあたり丹

沢の傾動山塊の紛糾や、道志の谷奥にまだ雪の深い富士山眺めたりしながら、やがて西の山麓の牧馬や篠原の静かな山村に、ゆっくりした晩春の杖をひくだろう。曾つて私がこのようない季節の午後おそく、一羽の大瑠璃の歌に聞き惚れた風坂の西のあの峠が、停車中の左窓から遙かに高々と見えるではないか。

上野原から猿橋まで、切り立った桂川の谷を左に、十いくつのトンネルを抜けながら進む列車の窓から、対岸の山麓に絵のよくな麦畠の平坦面をひろげている標式的な河成段丘を見るのはいつでも楽しい。あれは太古の河床の跡で、その侵蝕の復活の行われた度数を現すように一段、二段、多い處では三段もの平坦面を見せているが、その眺めは今のようにまだよごれない車内を用ありげに黙々と通る

車掌の真赤な腕章といい、気のせいか列車はそろそろ中央線の旅の気分を出し初めで来る。

そしてもう梅も青葉の小仏部落と大括弧のようないい小仏トンネル。行く心にはいつも前途の期待にみちた轟々たる序曲であるが、帰る時には、(これは私情に過ぎまいが)、何かひどく惜しまれる既往との別れの関所である。

相模湖や石老山、或は陣馬・景信あたりへの遠足や遊山のために与瀬で下車する人達を、さのみ羨ましく思わないでいられるのも、今はこちらがもつと遠い、もつと清明な空の下へ行くのだからであろう。そうでなければ私にしてもこんな朝を、津久井の谷を対岸へ、

桂川は鳥沢の附近で二度ばかり大きく曲流するが、此のあたりで谷は最も深くなつてい

るような気がする。事実対岸の段丘上に山を背にして可愛らしい部落の姿を見せて、いる小篠のあたりへ行つてみようと思えば、ぜひともこの狭く深く穿たれた谷を越えなければならぬのだが、其時渡る釣橋がじつに高く、橋のまんなかから見下すと、新緑の柔らかな雲に包まれた両岸の絶壁の下はひすい色をした涼しい灘と、ところどころにレースのようない砂地の現れた深い長い廊下になつていて。その砂地へおりて小鳥の歌や藤・山吹、或は時折の魚の影をたのしみながら晩春の一日を一人静かに過ごすハイカーがあつたとしたら、大いに羨まれてもいいであろう。

鳥沢の駅の真北にそばだつて両翼をひろげて、いる扇山も立派であり、その頂上に近い登山路には今の季節ならばたぶん紅葉のよう花をうつむかせた富士桜が見頃だろうと思うが、駅を出てまもなく北西へ転じる列車の左窓から錯綜して見える山々の奥に、ひときわ高く大菩薩連嶺の南のつゞき大藏高丸の平頂峰が、天下石の巨岩を見せながら嶮しい東壁をのぞかせているのも、此処からだけ望まれる眺めだとすれば、知らずに通り越してしまふのは、惜しいのではないだろうか。

大月を過ぎると桂川の本流は富士山麓へ向けて南へ分かれてしまつて、中央線は支流笹子川に沿つて登つて行く。左右から山が迫つて来て、川は浅い荒川の相を呈して来る。しかし此のあたりから笹子トンネルの入口へかけて、少くとも塩尻までの間の中央線では、春夏秋を通じて車窓の近くにさまざまの山草

の花や樹木の花がいちばん多く見られる處である。栗の花の季節にはあの甘酢ゆい匂が車の中まで流れこんで来る場所があり、夏ならば河原のいたるところ月見草と呼ばれている大待宵草の黄で彩られるし、線路のわきの北向きの山裾にはトリアシショウマの雪白の花穂やフシグロセンノウの朱色の花が、崖のくずれから滴つている山清水と共にいかにも涼しい。そして此の晩春には、線路ばたならばアズマギク、オカオグルマ、オキナグサ、又窓から見える少し沢のような場所の樹下ならばニリンソウ、コンロンソウ、ヤマブキソウ、キケマン、ヤマエンゴサク、サクラソウ、クリンソウなどが、白に黄に薄紫に紅にひつそりと咲いて、植物好きの旅客の眼を楽しませるのである。

そして初狩から笛子への途中、線路が川を右へ渡つて小さいトンネルをくぐつてから間もなく、もしも時がぴつたりと其の花期にあれば、右手の窓を压してそびえた春の芽立

ちの滝子山のいくつかの枝尾根のところどころに、それこそルビーを溶かして流したようなミツバツツジの花の美しいスカイラインを見出すことができる。

五月を迎えて

さて暗黒の中の線路の標高約千二百メートルの笛子のトンネルを抜けると、甲州もいよいよ國中の天地になつて風景も俄かに明るく、初鹿野から勝沼・塩山へと列車はブレーキを掛けながらひた降りに降つて行く。ところで

此の長いトンネルを出た途端、鉄橋の上から右手の窓へ現れる日川の新緑の谷を見るのが実に樂しかつたものだが、此の十年來は水もかれ樹も切られて、見る影もなくなつてしまつたのがまことに惜しい。私としては昔よく此の初鹿野の駅で下車して、まだ渓流の水も豊富に、樹々もまた鬱蒼と生い茂つた谷ぞいの小径を、よく田野の景徳院や嵯峨塩の鉱泉まで、途中さまざまな山草の花や小鳥の囀りに、喜ばされながら歩いたものだつた。

初狩から長坂までの間にスイッチバックのある駅は六つか七つを数える。汽車の旅といふものに未だ好奇心を失わない子供達を別にすると、大抵の人が此の迂遠な方法をひどく迷惑な時間つぶしのよう思うらしいが、私は一度見た附近の民家や風景を直ぐもう一度、しかも逆行しながら見直せるという点で面白く思つてゐる。此の点勝沼の駅はすばらしく。右手山寄りの次第に高まる傾斜地に、あの甲州農家特有の形の屋根や、白い壁と柿渋色の柱やぬきを見せながら、見事な葡萄園に埋もれた部落の家々。そこで働いている人々の姿や鶴や家畜。それから左の窓、駅に近く、これも葡萄栽培地に被われた一つ二つのなごやかな形の丘。そして更には遠く甲府盆地いちめんに漂う薄青い春霞の奥に、銀といふよりも寧ろ薔薇色に輝く雪の山頂をシンメトリカルに三つ並べて、ほんやりと柔らかく、まるで宙に浮かんでいるような北岳、間ノ岳、農鳥岳の眺望。この見ても見飽かぬ味わい深い遠近の眺めをよそに、旅はたゞ出発点と目

的だだけとばかり、準急なんぞでどしどし通り越してしまつるのは何としてももつたいない。勝沼から塩山・日下部へと大きく半円をえがいて、重川と笛吹川との灌漑地の農村地帯を走る線路からの眺めは、これも春夏秋を通してそれに美しいが、さまざまな果樹の花が咲き、色とりどりの若葉が燃え、葡萄園の葡萄の新芽が真珠色にほころびる今頃はわけてもいい。勝沼・塩山間で窓の左手に見えれる鳳凰山や甲斐駒ヶ岳の遠望、おおがらやまと小値山との間からちらりとのぞく金峰山、塩山を出て右手の窓からの眺めを深く秩父連峰の破風・雁坂、それにあの名高い峠をこちらに向けた大菩薩の本岳や鋭いピラミッド型の乾徳山など、このあたりこそ真に田園と山岳との詩的な邂逅点と言えるようである。そして若しも此の匹儔を中央線の他の場所に求めるとなつたら、善知鳥のトンネルを出たあたりの松本平南端の眺めか、或は僅かの間だが、右に八ヶ岳・蓼科山とその裾野の田園を、左に諏訪盆地をこえて遠く北アルプスの穂高岳を眺める茅野附近ではないかと思う。

甲府からは電気機関車がはずされて、煙を出して引張る蒸気機関車がガチャリとつく。走つて行く車窓の左手はいつも逆光で眼の明視にはぐあいが悪いが、こまごまと遠近いろいろの眺めの飛びこんで来る右窓の方は捨てがたい。殊に駅を出てから韭崎までの間、北西の空をかぎつて段々に近くなり、次第に優美な裾野の線を現して来る八ヶ岳が見ものである。しかしそうは言つても竜王・塩崎あた

りから左窓、甘利山や大崖頭の大きな緑の

山塊を背に、一段高くひらけた美しい御勅使川扇状地の遠景も捨てるには忍びない。

こうなると座席を右に変え左に変えなくて

はならない訳だが、何と言つても塩川の鉄橋を渡つて韭崎へ着くまでの数分間は、右窓の

客のための眺めだと言える。すなはち塩川の

清流に沿つて帶のように長く露出した段丘面の切り口と、その上に載つた茅ヶ岳とその緑の裾のひろがりと、いよいよ清明の度を加えて来た八ヶ岳の遠望と、これらすべてを豪華な背景として其の下に展開した耕地と集落群との平和きわまる風景である。

韭崎から汽車は又顯著な登りになる。此の登りは約一時間半を費して結局海拔九百五十五メートルの富士見駅まで続くであろう。こ

の間を至極退屈なもののように考へている人も多いが、しかし新府、穴山、日野春のあたり、静かな春の行楽を思ふ人にとっては、降りて歩いてみたいような場所は汽車の窓から見ただけでも到る処にある。土佐絵のように優美な金峰・瑞牆・八ヶ岳、釜無の谷にのしかかる鳳凰・甲斐駒の雄渾な山容、その前景に桃、杏、山桜の花をちぎれた雲か旗のようになびかせた山村、そして振り返れば遠くかかる

ぶる甲府盆地をぬきんでて、御坂の山々の上にどつしりすわつた晩春の富士。しかもこんな風景の中を行きながら、列車の窓から頬白や鶯、又時に黄びたきや黒つぐみの美声さえ聽かれるような場所は、木曾路ならばとにかく、塩尻ぐらいまでならば先ず此の辺だけで

あろう。

小淵沢ではいわゆる高原列車の小海線が又別の旅情をそゝる。こちらの線路としばらく平行して、やがていつのまにか右へそれで見えなくなる其の支線の、茫茫とした春のむこうに清里・野辺山などという高原の駅があつて、其処からのさすらいが直ちに詩となり絵となるような清らかに美しい八ツの裾野が広がつてゐるのだと思うと、あの貨客混成の三輪か四輪の古びた列車さえ懷かしまれのである。そしてやがて私にとつては七年ゆかりの信濃境、富士見青柳。このあたりの、風まだ冷やかな凜とした春の風景は、それでも幹や枝にみずみずしい樹液を通わせ始めた白樺といい、桜や杏の花を点じた山村農家の集落といい、量を増した谷や山川の水音といい、再びめぐつて来た光と温暖と喜びとの季節の美酒を、もつと味わい濃く醸そうとしている桶のようではないだろうか。

しかし茅野を出て汽車が湖畔を半周する諏訪盆地、上諏訪、下諏訪、岡谷のあたりはもう爛熟した春である。どの駅も賑わい、どの町も人出に盛つて、洋菓子のようになられたバス・遊覧バスの往来は織るようである。

諏訪湖の水面もこれに劣らず活氣づいて、点々とボートが浮かび、遊覧船が温かい水尾を光らせて、快美にはしり、遠く近く出ている漁舟は、その悠長に動かぬ事、まるで空間に碇泊しているよう見える。

そして一方此の三つの町をつなぐ山裾の田園や対岸のみぎわにならぶ幾つかの村落は、

一年のうちでの最も美しく夏の希望にみたされた五月を迎えて、青空の大好きな瓶が傾けてそ、いだ酒のような湖の水を、ふるえる縁で平行して、やがていつのまにか右へそれで見えなくなる其の支線の、茫茫とした春のむこうに清里・野辺山などという高原の駅があつて、其処からのさすらいが直ちに詩となり絵となるような清らかに美しい八ツの裾野が広がつてゐるのだと思うと、あの貨客混成の三輪か四輪の古びた列車さえ懷かしまれのである。そしてやがて私にとつては七年ゆかりの信濃境、富士見青柳。このあたりの、風まだ冷やかな凜とした春の風景は、それでも幹や枝にみずみずしい樹液を通わせ始めた白樺といい、桜や杏の花を点じた山村農家の集落といい、量を増した谷や山川の水音といい、再びめぐつて来た光と温暖と喜びとの季節の美酒を、もつと味わい濃く醸そうとしている桶のようではないだろうか。

今までにも度々経験したことだが、絵の展覧会や音楽会へ一人で行つて、「ああ、誰それと一緒に来ればよかつた」と軽い悔やみを覚えることがある。

芸術の美からうける心の感動を、それが深ければ深いだけ、親しい人々と共に味わい得ず分かち合い得ないことに對する恨みといふか、惜しさというか、ともかくそうした感情である。そしてそれに似た気持を、自然の美とむかい合つた時にも、われわれはしばしば経験するのである。

こういうふうに一人だけで味わつてゐるのはもつたいないとか、同感者を求めるとかいふ一種無私の感情が、たまたまベートヴェンの「第九」の合唱の時に、隣席の人を抱きしめたくなつたり、すばらしい自然を前に、見知らぬ誰彼に共感を引き出す言葉をかけたりさせるのである。

上高地の八月、原始林の中の小道を一人でひつそりと歩いている。盛りを過ぎたこの美

上高地

〔旅〕昭和三十年五月号

しい山間盆地に秋を思わせる静かさがひろがつて、時おりの小鳥の声が水のようだ。爽やかな黄と灰いろの高い木の間に、身にしみるような嶺線が見える。六月・七月の盛季に來た時には、思いもしなかつたような明神や穗高の神々しい姿だ。梓川の水も浴流^{ママ}を絶つて、清らかに鮮やかに、氷のように流れている。

あんなに豪勢だったホテルや旅館がひとつりと鎮まりかえつて、人の生きる単純な建物、愛すべく小さい敬虔なものに見える。

時おり出会う登山者の姿にも何かしらけなげなもの、巡礼の影のようなものが感じられる。

そういう時だ。そういう時にもまたわれわれは、この純粹美と静寂の山間を、同じ心を持つていそうな誰彼と共にしたいと思うのだ。

自分一人では担いかねる幽玄な自然美への感動を、誰かと分け合うことで一層こまやかな、一層実のあるものにしたいと願うのだ。

上高地の八月の夜、めつきりと客の減った旅館のホールで、二三人の客がコードを聴いている。そとはすでに秋を思わせる月夜である。厚い大きなガラス窓をして、かすかに梓川の流れの音が聴こえる。

しかし、しんとした広間では今モーツアルトのピアノ協奏曲が鳴っている。たぶん二〇番の二短調か二三番のイ長調だろう。名手クララ・ハスキルの弾くピアノの妙音が、つらねる玉や煙る水煙りのように響く。

管弦楽もじつに見事だ。窓のそとには、月光に照らし出された奥穂から西穂への暗い嶺

線、枝間のすいた柳や小梨。そして曲の合間に、給仕の女が静かに運ぶあたたかい紅茶。夢見ごこちの手が香ばしい湯気の立つ碗をにぎる……。

たとえばこうしたシーズン・オフの上高地を、私は一人で味わうに忍びない。幸福や感動を親しい友人と分かちたい心がうずいて、かろい悩みを抱くのである。

（「旅」昭和三十七年八月号）

N H K 教育テレビ現代国語

「詩のこころ」

テープおこし 堀 隆雄

美ヶ原熔岩台地

登りついて不意にひらけた眼前の風景にしばらくは世界の天井が抜けたかと思う。やがて一步を踏みこんで岩にまたがりながら、この高さにおけるこの広がりの把握になおもくるしむ。

無制限な、おおどかな、荒っぽくて、新鮮な、この風景の情緒はただ身にしみるようにな本原的で、尋常の尺度にはまるで桁^{けた}が外れている。

秋が雲の砲煙をどんどん上げて、空は青と白との眼もさめるだんだら。

物見石の準平原から和田岬のほうへ

一羽の鷺が流れ矢のように落ちて行つた。

今この詩はね、私が書きました詩としては随分前の、そろそろ半世紀近くですか。素人ですが、私は別にたいして太つてもおりませんしね、ですけど登りました。約二千米くらいありますけれど。それでね、地理学者の言葉では、辻村太郎博士の言葉ですとね「信

をどんどん上へ上げているとか、或いは、一羽の驚が流れ矢のように落ちていったとか、非常に、この広い空間ですね。それでそこには自然のダイナミックな動き、素晴らしい詩です。一体こういう詩を創る詩人の心、これははどういうふうになつてているのか、つまり詩を創る心というものの、これを今日は考えていただきたいと思います。

そこでさつそくですが、今の詩をお創りになつた詩人の尾崎喜八さんにスタジオに来ていただいておりますので、今日は色々と尾崎さんからお話を伺いたいと思います。

どうも、さつそくですが今の詩の場面ですが。美ヶ原という所ですが、私はだいたい文學に関係のある所は詩でも小説でも良くな旅行する方なんですが、美ヶ原だけはまだ、太つているせいか山は苦手なんですね。まだ行つてないんですけども。まずその情景ですね、それから、その時の、今の詩は大変有名な詩になつておりますが、その時の心持などをですね、一つお話しいただきたいんです。

尾崎 今読んで下さつたとおりね、本当にびっくりしてしまつて、尋常な尺度からまったく桁が外れているような感じがいたしました。

今の詩はね、私が書きました詩としては随分前の、そろそろ半世紀近くですか。素人ですが、私は別にたいして太つてもおりませんしね、ですけど登りました。約二千米くらいありますけれど。それでね、地理学者の言葉では、辻村太郎博士の言葉ですとね「信

「濃中央高台」といつてね。二千百米の一番高い所に登りますとね、三百六十度も見えるんですよ、熔岩台地なんですが。

ですから北アルプスも見えるし、後立山も見えるし、浅間の方も見えるし、八ヶ岳も見えるし、それから中央アルプスも見えるし、そろかと思うと志賀高原の方もすっかり見えりし、とても景色の良い所ですね。

講師 そうすると、まあ都会とかいわゆる下界とは違つた……

尾崎 全く違つた空氣ですね。本当の山の冷氣といいますか。今はもう、少し人が行き過ぎますがね。その時分はそれこそ半世紀前ですから、その時分は良うございましたね。

講師 そうすると、まあそこに行かれた時に思わず詩心が、という……

尾崎 湧きますね、当然。もうその、百曲りつて所を、百回あつたかどうか知りませんが、とにかく登つて行きますと俄然天地が開けるんですよ。そりやびっくりしますね。

講師 それであの、これ山の詩なんですけれども、その山村ですがね、山の麓にある山村。

私は実は山村まで行つた事があるんです。むしろ暮らした事があるんですが、十代の終り頃です。山梨県の富士山の麓の方のさみしい炭焼きで生計を立てているような山村で暮らした事があるせいか、尾崎さんのお書きになつた詩の中の「山村にて」という、あれを読んだ時に何か非常に打たれたわけなんですが。

尾崎 ああ、そうですか。ご経験がおありですね。

講師 で、あの「山村にて」という詩についてお話を伺いたいんですね。まず朗読をしてもらおう事にしましょう。

山村にて

甘やかな、ほんのり赤い五月の夕日が
この山ふところの村落を、新緑に重い風景を、
瞬間の希有な光で浸している。

夜に入る前に最後の娘が汲みに来る

高い、澄んだ井戸の水音。

昼間わたしが見た

石段を降りてゆく其の井戸のあたりには、
すでに夜の影がさまよつていることだらう。
多くの岩やきりぎしに宿するその音が、
この山村の迫つた深さを思わせる。

人が其処から汲みあげる平和、

人が水桶へあける限りない涼しさ。

あの井戸の近く、大きい柿の木の下で、
或る年の夏を暮らすべき自分を私は夢想する。

其の時、一冊のゲーテ、一冊のヘッセと共に、
わたしは人生の最上のものを知るだらう。

山と、青葉と、空と、星、
自然と人間に最も強く結びついた単純な生活の

つきぬ豊かさから学ぶだらう。

黒びかりする柱を照す吊ランプ、
たそがれの厨で物を煮る香。

あすは立つてゆく此の山間の古い家を
わたしは遠い昔から知つてゐる気がする。

講師ええ、今の詩ですけれど、この娘が最後に水を汲みに来る井戸と、あのへんなかしんみりくるんですか。

尾崎 そう、先生はその山村を生活なすったでしょ、富士山と御坂山塊の間あたりで。ああ、精進湖の近くでね。あそこいらは感じがありますよね。それはつまり、あの場合は人が水を汲みあげる音、人が何々をする、人については、今の詩に二つあります。あそこには人がなくつちやいけないんです。あれが大変な要素になるんです。だから山村つてのは、山つてものが生きてこないんですね。山は一人で立つてただけじゃエベレストでも何でもそれはそれだけのものですね。そこに人間が参加していったり、あるいは愛しに行つたり、びっくりしに行つたり、するとそこから山の意味が僕は始まるようなな気がして。山村を知らない、愛することを知らないのは山登りではまだそりや悪いけど駆け出しだすね。

講師ああそうですか。山村の魅力というものは、やはり山に劣らずあると……

尾崎 そうそう、我々とおんなじ人間がそこでそういう境地で暮らしてゐるつて事に、尊敬とか、愛とか、同感とか……。憐憫の感情なんかじやありませんよ。同感とか、愛とか、そういうものを持ちますね。それに貴男、周囲はいいんですもの。

講師 今の詩は、どの辺でお創りに……

尾崎 これはね、あの利根川の支流の神流川の奥なんです。乙父といふ、甲乙の乙に父親の父と書いておつぶと読むんですが。それをずっと行きますとね、十石峠といふ、信濃との境、ここは埼玉県ですが、小海といふ所に出るんです。そこへ泊りまして、明日は立つべきその山の宿、という事なんですが。

講師 さき程の詩も今の詩も山ですが、尾崎さんが山に入る気持、山に引かれるようになりになつたその動機というか……

尾崎 これはやつぱり人には誰でも初めてられて行つてくれる人があつたはずですね。まあ、幾人かの友達、みんな山の先輩ですが、それがつれてつてくれたんですね。それで、初めは東京付近の山を歩いていたんですよ。前秩父だとか、関東平野の奥の山だとか、まあ千米から二千米近い所を歩いて。

それに私は元来自然が好きなんで、小学校、中学校の両方を通じて理科が好きだつたんで。理科つて科目がありましてね、それが好きだつたんです。植物、動物、雲、星ですね、まだ他にも好きなものがありますが。それは後で時間があれば話しますが。

ですから、そういうものに満ち満ちてるでしょ、山は。それから、とにかく今と違つて若かつたですからね、良く歩けますよ。それに瘦せていたから身が軽かつたですね。それでも割合重たいリュックサックをしょつてね。

それからもう一つ、私は文学をやつているんですね。ふつと文章が書きたくなつたり、

詩を書きたくなり、そういう、早くいえば材料にも恵まれてるでしょ。美しいもの、愛すべきもの、さつき言つたとおりの事柄を人に感じるように、動植物の中にも感じますね。

講師 それで、あの、今の日本の青年達が非常に山へ行きますがね。パンフレットも案内書もいっぱい出て、本屋へ行くと山のようにあるんですが、それを見て出かけていますがね……

尾崎 それは、私が若い時だつて、もしもあんなに沢山あればやつぱりそれを買うでしょうね。ただしかしね、私は二十万分の一と五万分の一の地図を持つてね、それで行つて、自分の山を観念の中で形作つて……

講師 自分の山ですね。自分の目で見た山。尾崎 自分の目で見た山です。それだから、今の人達と少し違いますね。今の方達は往々はよいよいなんです、一生懸命登つてくる。帰りは早いですね、汽車の時間があるから、帰らなきやならないでしょ。だから山村、それがなくなつてしまふんですよ。それから山へ行つたらできるだけいろんな物を、自分の眼で見てくる事ですね。

講師 それで、自分の眼で見る事が、どうも詩のですね、尾崎さんの詩の根底にもちろん私達感じるわけですが、その少年の頃にですね、尾崎さんが初めて私は詩を創ろうとうるお氣持になつた時の事を、ちょっとお聞かせ願いたいんですが。

尾崎 それはやつぱり、私よりも先輩の詩人の詩を。もっとなんだか自分の口から言う

詩を書きたくなり、そういう、早くいえば材料にも恵まれてるでしょ。美しいもの、愛すべきもの、さつき言つたとおりの事柄を人に感じないように、動植物の中にも感じますね。

講師 それで、あの、今の日本の青年達が非常に山へ行きますがね。パンフレットも案内書もいっぱい出て、本屋へ行くと山のようにあるんですが、それを見て出かけていますがね……

尾崎 それは、私が若い時だつて、もしもあんなに沢山あればやつぱりそれを買うでしょうね。ただしかしね、私は二十万分の一と五万分の一の地図を持つてね、それで行つて、自分の山を観念の中で形作つて……

講師 自分の山ですね。自分の目で見た山。尾崎 自分の目で見た山です。それだから、今の人達と少し違いますね。今の方達は往々はよいよいなんです、一生懸命登つてくる。帰りは早いですね、汽車の時間があるから、帰らなきやならないでしょ。だから山村、それがなくなつてしまふんですよ。それから山へ行つたらできるだけいろんな物を、自分の眼で見てくる事ですね。

講師 それで、自分の眼で見る事が、どうも詩のですね、尾崎さんの詩の心を目覚めさせた……

尾崎 そういうわけなんですね、後はそういう商売をしていましたから小僧だの丁稚だの女中達が沢山いましたがね。私は一人つ子だもんだから、自分一人で遊ばなくちゃならない。問屋町だもんですからね子供が少ないんですね、大人ばかりで。ですから自分でもつてそういうものを発見して、いいなあと思つて、そこからやつぱり詩の心が……ですから、

のもおかしいんですが、小さい時から、中学時代から割合と英語が良くなつたんです。だから英語の先生がたいそう可愛がつて下すつて、しかもその先生が英米の古い詩が好きなんですよ。で、それを教えて下すつて、それで詩はいいなあと思つたところへ、高村光太郎だとか千家元麿だとかつていう人とか、それから又、自分でも英語の詩を一生懸命読んだりして。

それで私、やつぱり小説みたいのは書けない男なんですね。詩というかたちで書いた先輩があつて、それに刺戟されて……

私の家は隅田川の付近で回漕問屋をしていましたから、船は三、四艘あります。それで、そうですね、家から見ると向う側に石川島造船所だとか、それから、もつとひどい漁村だつた佃島だとか、その向う側に房総半島が見えたんですからね。それで、家の庭の石垣の所から、鮎がそれたり、しゃくえたり、ドジョウがそれたり、カニがそれたり、そんなんで……

講師 そういうものが尾崎さんの詩の心を目覚めさせた……

尾崎 そういうわけなんですね、後はそういう商売をしていましたから小僧だの丁稚だの女中達が沢山いましたがね。私は一人つ子だもんだから、自分一人で遊ばなくちゃならない。問屋町だもんですからね子供が少ないんですね、大人ばかりで。ですから自分でもつてそういうものを発見して、いいなあと思つて、そこからやつぱり詩の心が……ですから、

そういう時分の思い出で詩が沢山あります。

講師 それで、その何ていうか、人間、尾崎喜八と言いますか。尾崎さんの人間っていうものを、私、非常に強く感じさせられた詩ですね、「秋の流域」というのがあるんです。

が。「秋の流域」を読んでいますと、娘に語りかけるという、何かそういう形でお書きになつたようなんですが。

今度は、その詩についてですね、「秋の流域」について色々とお伺いしたいわけなんですが。で、まずやはり朗説によつて聞いてみる事にしましよう。

秋の流域 (わが娘、栄子に)

二日の雨がなごりなく上つて、
けさは天地のあいだに新らしい風が流れている。
暖かい道のうえの小石をごらん、
これは石英閃綠岩というのだ。
こんな石にさえそれぞれ好ましい名がつけられ、
一つ一つが日に照らされ、風に吹かれて、
きょうの爽かな、昔のよくな朝を、
何か優しい思い出にでも耽つているように
みんな薄青い涼しい影をやどして いる。

葡萄畠のあいだから川が見えて来た。

風景の中に自然の水の見えて来るときの
深い心の喜びをお前がいつでも忘れないよう
に!
だが銀の糸のもつれたように流れる川の両岸

には、平地といわゆる丘といわゆる、

この土地の人々の頼もしい生活と

画のような耕作地とがひろがつて いる。

そうしてこの美しいひろびろとした流域のむこうには同じ日本の空があり、秋があり、其処で営まれて いるまた別のたくさんのかくさん的生活がある……

講師 ええ、「風景の中に自然の水の見えて来るときの深い心の喜びをお前がいつでも忘れないように!」と。

尾崎 それが一番大事なんですね。

講師 そうなんですね、この風景の中に美麗なものが。私も実は娘が居るんですがね、なにかこの世の中には美麗なものがあるんだと、自然を含めてですね。これが本当の美しさだつていう事を教えておきたいってこんな気持ちになるんですが、やはりそんな……

尾崎 もちろんそのとおりですが、これはね中央線の甲府の手前の塩山で書いた。大菩薩へつれてつたんですが、この子はこの時、栄子つてやつは八つか九つで、三日ばかり雨に降られましてね、ずっと続いて。ところが塩山の朝はこれなんですね。歩きながらいろんな事教えました。

自分がやつぱり好きだから植物も雲でも何でも、石の名前まで教えちゃつてね。やつぱりそこには石英閃綠岩、なかなかいい名前をつけたもんだと普段から思つて いるから、

やつぱり一つはつきりこう教えて。

講師 自然科学の言葉を、そのまま詩の言葉としてお使いになるんですね。

尾崎 この中で生きてきますよね。ここは厳しい親父の、やつぱりしつかりものを教えてという心ですね。それがあります。ですから、

雲があれば、ああ、あの雲は高積雲つていうだとか、あれはあの巻雲つていうんだとか、いちいち教えましたね。子供は帳面を持つて歩いているんですね、親父がうるさいから。しかし、やつぱり一番大事な事は最後の「また別のたくさんのかくさんのたくさんの生活がある」、生きている人々が居るつて事が、ここが性根です、この詩の。石英閃綠岩をとおり越して、水も、しかし、その川の流域には、あるいは流域の奥よりもしない。そこにもなお何千何万という人々が、お百姓達やいろんな人達が生きてい、それがそれ達の生活をしてるつてことは、この娘が知らなければならない事だと思つて教えた。

講師 なるほど。やあ、あの尾崎さんの詩が良くヒューマニズムつてことがいわれている。その辺で私、今判つてきたんですけども、やはり人間つてものを発見してつかんでゆくところにやがて……

尾崎 それが一番大事です。自然ももちろんいいですよ。そりや自然是自分達の情緒を豊かにし、それから世の中の不思議さ、驚き、不意に驚く。それはそうですけれどしかし大事なのは人間です。お互に励ましたり、一生懸命働いて、この人々に対する気持が一番

大事なことだと、それを教える為に、そういう

大きな教科書ですよ。

講師 そうですね、風景も自然も人間も教科書であるという、そこでその、詩と人生って

言いますか、一番根本的な事をですね、今日はぜひお伺いしたいんですけど。詩と我々が生きてるって事との関わりをどういうふうにお捉えになつてあるか。

だから本当はね、詩は、長生きをして普段から詩の心を持つて、詩的感情を豊かに持っているとね、大変幸せなんじやないかって。講師 そうすると、我々の生命が終了する死という事についても……

尾崎　これは実際にあつた事でしてね。ある中学、これは安曇平ですから松本の先の、小さな中学で。そこへ見学に行きました時にやつてるんです。まだ、入られたばかりの女の先生でしたがね。

尾崎　ええ、それも。死ぬという事は別離ですね。いつもポエム、ポエジー！と、僕は思います。

講師　いや、それは非常に深い思想だと僕は思いますね。

そうすると、信州の子供達ですからね、他の子供達もそうでしょうけれども、とにかく本当に熱心に聞いているんです。この、モーツアルトの曲をね。若い先生が本当に孜々として弾いてるんです。外は秋晴れの安曇平野。それで、二三三やうへん

う人が生きてるんですから、これが一つの不思議じゃありませんか。

實に不思議であり、同時にそういうはか

講師 尾崎 つまり、やがて死んでしまう……

いが生きている。愛しあつたりしますが、それはね、僕は非常に美しい事だと思う。

講師 尾崎 それが自身が、詩であると……。
そうだと思います。そこから詩が、詩

両手を膝に、目をすえて、
きらめくよくな、流れるよくな、

尾崎 これも秋です。カケスつて鳥がいますね。きれいな青い羽根をした……。声は良く

的情緒ですか、感情ですか、生まれてくる。

音の造形に聴き入つてゐる。
そとは秋情れの安曇平、

田舎のモーヴアルト

中学の音楽室でピアノが鳴っている。
三毛こつは、男の子。

生徒たちは、男も女も、両手を膝に、目をすえて

と それじゃもう一つ 詩をお願いします
尾崎 これも秋です。カケスつて鳥がいます
よ。 えへ、な、う、う、羽根、そ、こ、そ、そ。
（は、良、く、）

きらめくよ／＼た。流れよ／＼た。
音の造形に聞き入つてゐる。

れきれいな青い羽根をした……声は良くありませんが、ゲーゲーって鳴きます。

講師 こうやつて、お話をしている事も詩だ
と……

そとは秋晴れの安曇平、
青い常念と黄ばんだアカシア。

尾崎 もうすでに私は詩を感じていますね、

自然にも形成と傾聴のあるこの田舎で
新任の若い女の先生が孜々として
モーツアルトのみごとなロンドを弾い

自然にも形成と傾聴のあるこの田舎で、
新任の若い女の先生が孜々として
モーツアルトのみごとなロンドを弾いている

かけす

山国の空のあんな高いところを

二羽三羽、五羽六羽と

かけるの鳥のとんで行くのがじつに秋だ

あんなに半ば透きとおり

ときどきはちらちら光り

空気の波をおもたくわけて

もう一度と帰つて来ない者のように

かけすという仮の名も

人間との地上の契りの夢だったと

今はなつかしく柔らかく

おりおりはたぶん低く啼きながら

ほのぼのと暗み明るみ

見る見るうちに小さくなり

深まる秋のあおくつめたい空の海に

もうほとんど消えてゆく……

講師 朗読を、こう今お伺いしていると非常に細かく気をお配りになつて読んでるように

……何かコツ、いやこの詩はこう読むんだといふ、もしそれがあつたらお聞かせ……

尾崎 まあ、作者本人が朗読するのですから、

一番良く解つてゐるわけですから。

ここは、だんだん消えてゆく鳥達。今まで一緒にずっと春、夏、暮らしてた。家の周りにも沢山おりましたが。

これは一体、あの八ヶ岳の麓の富士見高原で書いたなんですが。

それがね、南の方に飛んで行くんです。

伊豆半島へ行くんだか、どこへ、紀州へ行くんですか知りませんが、暖かい所へ行つてしまふ

まう。たかーく。普段は低い所を飛んでいるくせに、高い所を飛んでいくんです。それで、なんていうんでしょうね。

山国の方に飛んでいくところが、

うーん、そこがね哀れ、別れ……

尾崎 詩のリズムとしても、朗読にはそれを生かさなくつ

ちゃ駄目でしようね。あの前のやつとはまるで違う、調子が違いますね。空間の感じも出なくちゃいけますまいし、人の世の契りみた

いなもんだつた、仮りの契りだつたような、そういうはかなきも出さなくつちやならない

し。それでしながら、多分低い声で啼いてい

るんだろうつていうふうに思いたくなるし。

それとだんだんに行つてしまつていうと、

詩の読み方もだんだん遅くなつて、調子が遠

いものになつてしまふ、かすかになる。

講師 これ、そこでお書きになつたと、今お

つしやつたけれども、尾崎さんはいわゆる現

地つていうかその山なら山の、そこでお書きになる事が多いのですか。

尾崎 そうですね、この詩は一息に出来たんです。私は帳面へ気に入つた言葉、こりやい

いなと思うやつは、いつでも手帳を持つてお

りましてね。そいつにすぐに書くんです。

今日も、書きましたが、ちょっとした、電

車かなんかの踏段、バスの踏段でも、一つ上

がった拍子に、ひよつといい言葉ができると、

すぐに忘れないうちに書いておくんです。

そいつが真中、中心になる事もありますし

ね、書き出しになる事もあるし、色々ござい

ますが。言葉、詩人にとつちやもう言葉が一番大事ですか。

講師 で、その場でつかまえて、わいてきた言葉が一番生きている。

尾崎 生きてると思いますね。そりや後で色々修飾すれば出来ますがね。やつぱりこうやつてお話しする時に、僕の、つまり語気の荒さつていいますか、あるいは優しさと、そういうのが出るとおんなんじように。その場のもの、雲を見て、あるいは鳥を見て、もうすぐそこである言葉がうかぶとそこに詩の心も一緒に。言葉と一緒に詩の心が、詩の心がまた言葉を発見する。だから、どういう詩を書いて下さいなんて頼まれちゃだめなんですね。やつぱり、自發的なものなんですね。

講師 ああそうですか。や、どうも色々とありがとうございました。

ええ、今日は「詩のこころ」という事で、

詩人の尾崎喜八さんから色々と深いお話をお伺いしました。私達がやがて生命を終る、この死という事ですね、それも一つの詩として見ていくという、この尾崎さんの深い詩の心ですね、これはもう私も今日は、この言葉、私にとつても忘れられない言葉になりました。

死というのはたいてい怖いものです。それをも美しいものとして見ていく心。どうぞ、

今日の話を、皆さん方の人生の糧として下さ

い。さようなら。

(昭和四十五年三月二十三日放送、講師大河原忠
藏氏) 23頁編集付記*2 参照

尾崎喜八への旅

補遺一

故伊藤海彦
新聞雑誌掲載分より

地上の見者

—尾崎喜八著『高原暦日』を読む—

「私はある過去の民族のように、自分の歌の背後で滅びたいのです」

1

これは、あのリルケが『ロダン』の稿を終えてイタリイ、ヴィアレジオにその害された体を静養させていたとき、エレン・ケイに送つた輝やかしい暗さと、深い意思とにみちみち

た手紙のなかの言葉である。平生この言葉を私は内面から湧きあがる声のように聞いていたのだが、尾崎喜八著『高原暦日』をよみ終えたいま、なお新しい光輝をともなつてこの言葉が私の胸底にひびき渡るのを感じた。それは、尾崎氏がこの近著であくまでも「自分の歌」を奏でているということによるものであり、又その背後で滅びても悔いはないほどその歌が完き円熟への季節に入りつつあるといふことにもよるのである。その序文に氏は別著『美しき視野』の大作と共にこの著も一つの自然文学とでも名付け得られるような新しい文学の領域を切りひらくものだと言つておられる。試作の域を出ないかも知れぬが、と氏は謙虚な態度でのべておられるが、かつて『山の絵本』『雲と草原』を著わした氏のそうした作品はこの国のがわゆる隨筆と銘うたれた種類のものではなく、と言つてある人のようない詩的な海外啓発の書でもなかつた。博物学と文学を結婚させようとする氏の意思は昔のそつした数多い作品のなかにもみちあふれ

一つの物を見るとき我々はなんと自分が貧困であるかを知らねばならないだろう。

自然が大きすぎるとそのとき人はいうだろう。然し私たちの眼はあまりにも与えられた恩恵を受けとつていなさすぎはしないだろうか。この我らの地上は我々人間のために美しくつくられてゐるのである。この地上こそは我等の生が無限の悦びに酔う天国であるべきなのだ。神はそのように地上をつくられた。しかも私たちがその地上に絶望のみを育てなくてはならないのは人間の孤独と社会の機構にお、われてしまつたその本来の地上をみつめ得ないためではないだろうか。暗い地上を機構に求めるのも全てではないし、それを仕方のないものとしてエルサレムに夢を運ぶのも嘘である。たしかに我らはあまりにも孤独であり、別離のただなかに存在している。在るということそのことが既に別れであるよう

に我らは時間を営んでいる。しかしその孤立した人間を差別なく押しつづむこの美しく偉大なる秩序を、私たちはなぜそのただひとり

でしかない胸にだきとめようとはしないのだろう。尾崎氏の文学は、こうした本来の地上を我々に告げしらせてくれるのである。そして大いなる生の脈ハクが私たち絶望する人々の各々の脈ハクにつながっていることを。それ故にその大いなる生を通じてあららしい人間の権利が生れるだろうということを！

ある人はこの種の作品を文学とみとめないかも知れない。恐らくその人々は言うのだろう（これは事実の再現でしかない）と。そして創作より価値ひくい小品文、詩的なかぎりを持つたいわゆる隨筆文としてしか受けとらないのだろう。しかし私は言う、これは一箇の文学作品であると。

あのモオリヤックの「小説は現実の再現ではない。置きかえである」という言葉を、私は小説ばかりでなく芸術のこうした大きな問題をはらむ一点への重要な言葉と考えているが、この「置きかえ」という微妙な言葉を人は理解しなくてはならない。それは決してある種の小説家のように事実を一部脚色することや、いくつかの事実をよりうまいものにむすびつけたりすることではない。それはあのリルケの晩年に実った偉大な思索「転生」にも似たものといわねばなるまい。一つの記録がそのまま語られていたとしても單に事実を文に記録したことには止まっているのではない。そこには作家尾崎の心象を通して新しい知られなかつた面と光沢を持ち得た（そのものでありながら別なもの）が創られていくのである。我々が見透し得なかつたそのもののすべ

てが、そのものの深部が「置きかえ」——「転生」という想像の掌でなされていることを見逃してはならないだろう。

3

この著は、暗い絶望から夢物語によつてではなく、正しくおされた地上というもののへ眼差しと、そこにそあるべき人間の位置と生活とを私によびさましてくれるのだ。

「おお私はそれを、生を信じます。時代が作り出す生ではなくあの他の生、小さな事物の生、動物や大きな平地の生を。数千年にわたって続くこの生は無情な様に見えますが、しかし運動や生長や温情にみちたそのもろもろの力の均衡を保つてゐるのです。だから私は裸足ではるかな道を歩いていつて砂粒一つおそらくせずに自分の体にいろいろな形にして全世界に与えて感じさせ、出来事に会わせ、親近性を見出させてることが好きなのです」

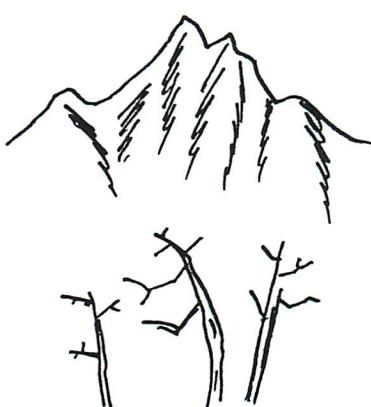
ふたたび前記のリルケの手紙からこのように文章を長く引用したのも、この尾崎喜八氏の創作の深部をよりよく理解し、よりよい共鳴音をひびかせ得るようにその老婆心に他ならない。

私たちには、氏の自分を「一個の石よりもすぐれたものとはせず」、氏に「あてがわれた生を生き」、氏以外に出し得ないひびきをひびかせ、氏の心に命ぜられた花を咲かしたこの本を、爽やかな我々の生のめざめとして受け取らねばならない。尾崎氏は常に若々しい二十世紀多島海を私にそそいでくれるひとで

ある。「私のために一生の昼間はもう傾き」と言つておられるが、私から見れば氏は「永遠の春」である。絶望も、疑惑も、憎しみも、氏の春の掌の上では無言の愛撫に微笑するのである。「本来の地上」をみつめる見者、尾崎喜八氏のこの書に、私は祝福されたもののような歓びを受けたのだ。

終りにこのような作者を理解し得なかつたのか、簡素で美しくあらねばならない本の装いが、最も卑俗な、唾棄すべきものでさえあつたことはかえすがえすも残念である。そのおびただしい誤植とともに出版社は大きな汚損をこの作品にしたことになる。改版の機会に装いを変えるとか、誤植は誤植表を別刷して添付するといった措置がとられてしかるべきではないだろうか。この新鋭の出版社は私の親しい方の經營であるが、それだけに私は真正直な苦言を呈したい。

（『信陽新聞』昭和二十三年四月十五—十七日）



重本恵津子 著

『花咲ける孤独』を読んで

藤 沼 貴

1

尾崎喜八。

その名を私は忘れない。その詩を、その自由な散文を、その人柄、その生き方を忘れない。

詩や芸術について、「べし」だの「べからず」だのと言うのは愚かなことだ。それは交通規則にでもまかせておけばいい。

しかし、それを承知の上で、あえて「喜八を忘るべからず」と私は言う。

それは、ひとかどの詩人や文芸評論家のなかにさえ、「尾崎喜八は大正期をしめくつた詩人であつて、昭和期をはじめた人ではない」とか、「かれの詩は現代詩としての機能をはたすものではない」となどと言つてゐる人がいるからである。

なんということか。喜八の詩や散文を私は今も読み、読むたびにたぐいない刺激を受ける。私ばかりではない。そういう人たちたくさんいる。現代だけで生きている若い人たちの間にもある。これは事実だ。どんな理論や「歴史的視野」がある知らないが、事実にさからうことはできない。喜八を読んで喜びを感じてゐる人たちをつかまえてまさか「お前は感覺も生き方も古い。現代人ではない」と言うつもりではあるまい。

『花咲ける孤独 評伝・尾崎喜八』の著者重本恵津子さんもおなじ思いであろう。「喜八、忘るべからず」。その作品と生きた跡を人々

に伝えたいという真情が、この一冊にみなぎつてゐる。

昭和十年（一九三五年）八月、霧が峯の「山の会」の講演「山と芸術」のなかで、喜八はこう言った。

「皆さんは毎日、他人のところで、その人たちが知らずにいたり、等閑にしていたりすることができます。その時、皆さんは決して躊躇なさつてはいけません。その人たちが、自分たちの財産としなければならないような有益な部分を、皆さんは手に取り上げて教えてやらなければいけません。

そうしてそれに対する報酬としては、ただ一個の与え手、一個の道案内であるといふことをもつて満足なさらなければなりません」

重本さんは尾崎喜八を人に知らせることで、まさにこの役割をはたした。そして、「一個の道案内」であることで満足した。そのため、著者は対象への熱い思いにみちていながら、感情へもたれかからず、対象を隅々まで知りながら、饒舌におちいらす、ありあまる筆力をもちながら、散漫にならなかつた。その結果、傑作と言つてよい評伝が生まれたのである。

この本は第十四回潮賞・ノンフィクション部門の入選作だが、審査員がこぞつて第一位に推したのも当然である。

尾崎喜八が最初の詩集『空と樹木』を出し

たのは一九二二年、かれが三十歳の時である。

これはかなり遅い。詩の才能は音楽の才に次いで早く現れると言われる。詩の得意な

「天才」少年、少女はどこの中学校にもいる。だが、二十歳すぎると、たいていは「ただの人」になる。元・天才が昔の入選投稿詩のつた小学生新聞を自分の子供に見せて、笑われたりするのである。

喜八が子供の時から、こういう「天才」以上ものだつたことは疑いない。しかし、かれは言葉の才だけで詩を書こうとなかった。（書いたにしても、人には見せなかつた）。言葉の才をもてあそぼうともしなかつた。かれは詩が言葉の空転の誘惑を脱して、生の不可欠の部分となるまで、辛抱づよく待つた。一方、生活が物質的な存在条件を獲得する闘争

の荒野から脱して、詩になるための具体的な道筋をたどりうと努力した。だから、三十歳で最初の詩集を発表するまで、喜八はさまざまな苦しみをくぐり抜けた。たくさんの詩人、作家、哲学者を研究し、それを取捨選択した。自分から求めたわけではないが、家庭的な不幸や恋人の死も体験した。心理学者や精神分析学者ばかりでなく、文学研究者と自称する人なら、この喜八の背後の生活を詮索し、詩人としてのかれの形成過程といつたものを、因果の系列に整理して見せたかもしれない。

重本さんはこうした喜八の生活について、もちろんかなりくわしく書いているが、無用な深入りはしない。これはおそらく正しいこ

とであろう。詩人や芸術家はなるべく、詩人と藝術家として立つたところから見るほうがいい。

「いわばしろうとの歌だ」と言つたことがある。これは詩が言葉の世界の自閉者であることをやめ、「くろうとの詩」でなくなるまで

待つた喜八の粒々辛苦を、丸ごと見落としたものが、けだし「名言」であろう。喜八自身苦心惨憺の詩句を読み取られるより、自然に声に出た「しろうとの歌」を聞いてもらいたかったのである。

しかし、喜八自身はこの最初の詩集にひどく不満だった。一九五九年に出た『尾崎喜八詩文集一 空と樹木』の「後記」で、自らこう酷評している。

「内容技術共に独り善がりで饒舌で粗雑など……ほとんど手のつけようも無いような愚作ぞろいである。しかも本人はこの初めての詩集の序文に、『人間及び詩人としての私の存在理由は、私自身がより強く正しく生きることによつて歌い、より明らかにより美しく歌うことによつて生きるという、この単純で熱烈な要求を実行する事のほかに無い』と広言しているのだからなおさら始末がわるい……」

「処女詩集の思い出」という小文でも、やはり容赦がない。

「処女詩集と言ひながら、何處をさがしても、喜八はいたるところに歌を発見する人として出発した。普通は詩にならないものまでが、かれのもとでは詩になつた。『空と

信過多。耳ざわりで、野性で、多弁で、程よいさというものを全く無視した修辞の押しつけ。言うところの世界主題と、自然美や生活理想をモティーフとしての対位法。……物に憑かれたような表現意欲の沸騰と尊大な自己主張……」

だが、これは作者自身ならではの厳格な反省である。私はこの詩集が好きだし、距離を置いて冷ややかに見ても、「愚作ぞろい」どころか、多くの秀作があり、すばらしい「名作」も一つならず発見できる。「人間及び詩人としての私の存在理由は……」という言葉も、喜八自身は「始末が悪い」とこき下ろしているが、この詩集の本質的的確についている。実際、この詩集には「生きることによつて歌い、歌うことによつて生きよう」とした作者の狙いが、かなりの程度まで実現されている。そして、それは処女詩集ばかりでなく、喜八はその詩文集の最後の巻に『いたるところの歌』という題名をつけ、次のような序詩を掲げた。

いたるところに歌があつた。
いくたの優しいまなざしがあり、
いくつの高貴な心があつた。
こうして富まされたその晩年を
在りし日への感謝と郷愁で
装うことのできる魂は幸いだ。

まさに、喜八はいたるところに歌を発見する人として出発した。普通は詩にならないものまでが、かれのもとでは詩になつた。『空と

「樹木」という題名がすでにそうだ。空も、雲も、木も、芝生も詩だつた。自然と田園ばかりでなく、「蜜蜂の巣のまんなか」のような東京も詩になつた。テニスの試合も井戸端も詩だつた。焦げた飯も台所も

焦げついた飯の健康な匂いは魂の健康と飽和して、
独身生活の朝の台所に天衣無縫の二重唱を織る
と歌われた。

「田舎娘」は繰り返し歌われた。この一連の

喜八の作品にむかって、「こういうバラッド

的な作品は、今では小説で扱われる主題をとりあげたもので、現代的な詩ではない」と、

喜八の作品には、毎日バラッドを歌つてゐる。もし、ギターにのせて歌うものは詩でないと言うのなら

「いたるところ」に詩がなくなつてしまつてはいかない。

こうした詩の再発見の頂点が「田舎の夕暮」である。喜八自身はこれも愚作とみなし

ていたのかもしれないが、重本さんによると、

この詩は「近年、朗唱法を学ぶ人たちの間で愛されている」。やはり重本さんの紹介によると、川手鷹彦さんは「この詩は近代抒情詩の中でも最もすぐれたものの一つ」と評価している。私もおなじ意見である。

お互いに精励して、正しいりっぱな者にな

りましよう
と、まつこうから言って、人にまつすぐ受け

とめられる詩がめつたにあるものではない。
しかも、これが恋の歌だつたのである。
重本さんもこの詩を全編掲げて、そのすばらしさを読者に伝えている。

3

「田舎の夕暮」には（水野實子に）と添え書きがある。重本さんが第三章「新しい土地で」で書いていることと、卷末の年譜をもとに、

實子との出会いの前後をまとめると、次のようになる。

一九一〇年

（大正九年）初めて水野家を訪れる

一九一二年

水野家の近くに移り住む

一九二二年

詩集『空と樹木』出版

一九二三年

関東大震災

一九二四年

水野實子と結婚。詩集『高層雲の下』出版

一九二五年

長女栄子誕生

この簡単な一覧からでもわかるように、喜

八の詩人としての独立と、實子との出会い・

結婚は年代的に完全に一致している。これは時間的な偶然の一一致ではない。「田舎の夕暮」

より先に實子にささげた詩「カティー・メイド」のなかで、喜八はこう歌つてゐる。

いつも、いつも晴ればれとしているお前を見ると、

人はついほほえんでしまう。

そうして人生についての今までの考え方をもう一遍考え方をしてみなければならぬと思つ。

カテージ・メイド、カテージ・メイド。
お前は田舎の太陽だ、
女というものの本当のすがただ。
詩が生活となるまで、生活が詩となるまでよつて生きよう」とした喜八は、トルストイやロマン・ロランを読み、光太郎や「白樺」の人たちと交わつた。しかし、實子という理想と現実の融合、生身の真と美を見、その生を共有することによって、自分の目指していく詩人になれた。實子は尾崎喜八という塔のなかに隠れて見えない柱であつた。

喜八が尊敬したトルストイもロマン・ロランもこうした生身の伴侶を発見できなかつた。喜八の親友光太郎にとって、智恵子は創造の起爆剤だつたが、喜八の場合とはまったく別の意味においてであつた。

重本さんは最初、實子さんの伝記を書いており、それは第十三回潮賞の佳作に選ばれた。その時、審査員たちから、まず喜八自身のことを書いたほうがいいと勧められ、『花咲ける孤独。評伝・尾崎喜八』を書き、次年度の第一位になつたのだ、といふ。

審査員の言うとおり、いきなり實子さんのことを見まされたら、重本さんほど喜八のことを知らない大多数の読者はとまどつてしまつただろう。その意味で、喜八にもどつたのは正しい。しかし、實子に目を向けた重本さんの眼力は確かである。今はフェミニズムの時代だから、女性のことを書いていなければならないといったものではない。喜八が實子を柱と

して詩人として立つたことは全体として重要なことだし、一九二〇年代という危機の時代にいたる詩人としての、また、生活人としての喜八的回答でもあつたのである。だから、喜八がいつそうよく實子を見つめることで、喜八がいつそうよく見えてくる。

最晩年、ほとんど死を前にして、喜八は「妻に」と題して、一つの詩を實子にささげた。この詩を掲げることが、實子を語るものとして、もつともふさわしいであろう。

妻に
晩い午後のひとときを私がなおも机にむかつて

ペンを手に一篇の文章と闘つている時、

お前は音もなくこの部屋へ入つて来て

静かに憩いと慰めの茶を置いて去る。

四十幾年の生活を倦みもせずにいそしんでお前が常に私のかたわらに在つたということ、遠く人生の大河を共にくだつた私たちの小舟で

お前がいつも賢い楫取りであつたということ、

それはお前が私にとつての守護の天使、この家と家族にとつて守護の靈だということだ。

そしてそのお前への深い信頼の中心に私は安んじて生の鍾おもりを下ろしてきました。

人々への善意と、自分自身へのきびしさと、撓むことのない忍耐力とはお前にあつての三つの徳。

私のたまたま我執の闇を明るく優しく照らすために
お前は静かに愛と警告の灯を置いて去る。

4

『高層雲の下』の後、喜八は二つの詩集を出した。一九二七年の『曠野の火』と、一九三三年の『旅と滯在』である。その間に、山歩きをはじめ、山についての詩ばかりではなく、散文も書くようになつた。その最初の作品は、一九三〇年『都新聞』に掲載された「新年の御岳・大岳」である。

山の詩は『旅と滯在』にまとめられ、散文のほうは『山の絵本』という最初の散文集となつて、一九三五年に出版された。この本は、重本さんも書いているように、喜八の著書のなかで一番よく知られており、角川、新潮、岩波の文庫になつていて、今も愛読者が絶えないものである。

自作にたいしての点のからい喜八も、この散文集は気に入ついたらしく、自信もあつたらしい。一九五九年に出た『尾崎喜八詩文集四』の後記で、かれはこう書いている。

「その中で詩と科学とが共に奏でて歌を成している文章、そこに生きる事が実例によつて勧奨されているような文学——日本でこれが最初の詩精神につらぬかれた生活と自然愛との協奏曲のような文学——でなければならぬ作を論じることはできない。また、戦時の創

かつた」

しかも、かれは「国木田独歩の「武藏野」や徳富蘆花の「みみずのたわごと」のようなものではない」と言つて、自分の作品が自然との同化や、自然と文明の二つから自然を抉ぶといったものではないことを表明している。

こうして、かれの創作は「詩+生活」から「詩+生活+自然」というつながりをもつことになる。と言えば、簡単だが、実は、ここにはたくさん深刻な問題がひそんでいた。

喜八はことさら自分をかくそいとはしなかつた。むしろ、自分についてたくさんのことを語つていて、自分を見せないかたくなに職人気質の人ではなかつた。しかし、本当の苦心や苦労については、語ろうとしなかつた。みごとな料理を客にすすめ、調理の仕方まで説明しながら、厨房には決して人を入れないいきな板前に似ていて、この時期の喜八は内面的にずいぶん苦労していたはずだが、その奥底は知られていない。

重本さんはこの時期をあつかつた章に、「自然への惑湯と個の確立」という題をつけている。この頃、喜八の「生活」と「個」は片方からは詩、他方からは自然にはさまれていた。それは、個の確立の可能性をはらむと同時に、個の危機の兆候でもあつた。時代は折しも一九三〇年代。日本の國や国民ばかりでなく、世界や人類、芸術や人間性の危機の時代でもあつた。

この時期を分析することなしに、喜八の創作を論じることはできない。また、戦時の創

喜八のいわゆる「変節」を解き明かすこともできない。「個」と個々の「生活」を超えた絶対的なものへの傾斜が、この自然接近の時期にすでにはつきり現れている。『尾崎喜八詩文集五』（一九五九）の後記で、かれは一九三八年に出た『雲と草原』、その他の散文集について、「見られた物の中からその場限りでないものを、かりそめならぬものを、言わば神の微候を見出そうとしたのである」と言つてゐる。

だが、かれが求めた絶対者には自然そのものにかぎらず、「くに」、「はらから」といったものも含まれていた。喜八にとつて、そして、日本の知識人すべてにとつて、リルケもベートーヴェンも学芸だったが、「くに」や「はらから」は自然「的」なものであつた。そのことは喜八の詩の形にも少しずつにじみ出てくる。つまり、それは詩情ばかりではなく、詩作法の問題でもあつたのである。

いま都にぞわが住みて
秋風の音ふと聴けば、
思い出の野に枯葉焚く
秋の煙のにおいする、
はるけき幸のにおいする
これは「思い出の歌」の最終連である。喜八はなぜこれを、文語で、しかも、七五調で書いたのか。
「牧場」もそうだ。これはたつた三連の小さな詩だが、秀作である。

あまたの牛をはなぢけり。
あまたの牛はひろびろと
空の真下に散りにけり。

夏もおわるか、白雲の
きょうも峠をこえて行く。
立ち臥す牛ら眼をあげて、
雲の行衛をながめけり。

山の牧場に風立ちて、
夕日の光ながれけり。
風に送られ、日を浴びて
牛は牧場をくだりけり。

正直言つて、私はこの詩が好きだ。ひとり
でに愛誦したくなる。しかし、喜八がこれを
七五調の文語で書かなければならなかつた理
由は何か。なぜ戦後になつて書いた「春の牧
場」のように

あかるく青いなごやかな空を
春の白い雲の帆がゆく。
と「喜八調」で、「牧場」が書かれなかつたのか。

2節で書いたように、喜八はいたるところに詩を見いだした。かれはまるで鍊金術師のように、手に触れるものすべてを詩に変えた。空や木ばかりでなく、焦げた飯や台所までも。それどころか、悲惨な災害さえも、喜八のもとでは詩になつた。一九二三年九月、かれは一年前の関東大震災を思い起ししながら、こんな詩をつくつた。

尻っぽしよりに結いつけ草履、
姉さんかぶりや海水帽子、
災厄にめげぬ明るいたましいと、
その真剣さと、その親切さと、
異常に美しいわが東京の女らよ。

一切の無駄をかなぐり捨て、
眞の面貌にかがやき出るおんみらこそ美し
い。

（女等）

ここまで踏み込まなくていい、その権利はないのだ、と自分に言いきかせて、私はその難問から逃れるのである。

しかし、一九世紀から一〇世紀になるにつ
これは難問である。こんな小さな書評はそ
花咲ける孤独』の最後の詩「詩術」で、こ
う歌つた喜八が、なぜ抵抗も撓みもなしに、
日本人の伝統の鉱床に訴え、「ひとりで」に愛
誦されてしまつ詩を書いたのか。

あなた元気がうれしい。
身ぐるみきれいに焼け出されながら、
晴朗な心でいるあなたがうれしい。

れ、血なまぐさきをはるがに超えて、人間の手でおこなわれながら、人間の手の及ばないものになつた戦争。それはついに第二次世界大戦となり、アメリカと、ヨーロッパ、アジアの諸国を悪魔の業火のなかに追いこんだ。

広島、長崎ではその火によつて、一瞬のうちに数万の命が奪われた。人類がどれほど悔い、どれほど恥じても、消しつくすことのできない黒い汚点である。

私自身この時代に生き、一心にその時代にのめりこんだ。私はエリート軍人を養成する学校の生徒だった。東条英機や山下奉文は同窓の先輩に当たる。それを思うと、今でも居たたまれなくなることがある。ただの後悔ではない。その時代に生きていた刻印が、今の私もありありと残つてゐるからである。

重本さんが「私のまわりにいた大方の少女には、「天皇」も「國体觀念」も「軍國主義」も空念仏のように流れていつただけで、肌まで浸透することはなく、まして心に深く入りこんで人間形成の根底になるということはほとんどなかつたようと思われる」と書いているのを読んで私は啞然とした。

これは私の体験とはまったく違つ。まるで戦後派の感覚ではないか。大人なら希有な例外はあるにしても、若者や少年少女の心は時代精神そのものだと、私は思いこんでいた。重本さんは本当はもつとずつと若いのに、喜八と自分の年代を多少とも重ね合わせるために、大幅にサバを読んで年を多く言い、戦中派になりすましているのではないか、という

気さえした。

戦争とは何か。戦争とは戦争である。そう

としか定義のしようがない。生や死とおなじである。生とは何か。生は生である。死とは

何か。死は死である。ほかのものでは言い換えられないのつべきならないものなのである。だから戦争について語ることはとてもむづかしい。ほかのことなら、距離を置いて冷静に見るほうがよく見える。しかし、死の経験のない者が死について語るのは空虚だ。必死に生きていない者の人生論は人をいら立たせる。

戦争がおわった後、「客観的に」戦争を論じた言葉は、空虚というよりむしろ、戦争のなかにいた人にたいして残酷だと、私は思うことがよくある。日本が中国その他で犯罪行為をしたという非難や批判は今も毎日のように聞かれる。その「犯罪」に参加した人は、今もわれわれの間に何千何万といははずだ。自分の隣人が、あるいは自分の父さえもがそうかもしれない。しかし、その人たちが何かを語つたことはない。肯定も反論もない。語ることができないのだ。どれほど非難されようと、ただ黙つて聞いているほかはない。

② 戦後自分で自分を厳しく罰し、誠実に行動した

重本さんは、さつき言つたように、実際の年はいき知らず、心情的には戦後派だから、自ら痛みをもつて喜八の「罪」を見るというより、同情をもつて見てゐる感じがあるが、それでも、重本さんの言い分は正当だと思う。

喜八は戦争、流血ばかりでなく、争いや人を傷つけることがきらいだつた。われわれに知られているかぎりでは、かれが自らすんでそのようなことをした例はひとつもない。「新年言志」、「新戦場」などの詩がしめしているように、戦争にも反対だつた。しかし、喜八は生きることを愛し、生きることを愛して

れないが、それは残酷なことである。詩や文學にかかる人のるべきことではない。

具体的な名を挙げるのは、いささか憚られるが、たとえば、西条八十と尾崎喜八を同列に並べて、戦時中の言動を攻撃することはできない。この二人はどだい人間の出来が違う。尾崎喜八に「芸者ワルツ」が作れるとでも言うのだろうか。

重本さんにとっても、当然、喜八の戦時の「変貌」は大きな問題であつた。重本さんはほんとんど人目に触れないような資料まで調べて、この問題を追究した。そして、喜八が他の詩人以上に非難されたり、「戦犯」とまで呼ばれる理由のないことを、次の二つの面から立証しようとした。

① 他の文学者にくらべて、喜八の罪はむしろ小さい

いる人たちを愛し、その人たちとともに生きようとした。そして、そのなかに詩を見いだし、その人たちに詩をささげようとした。まだ戦火が烈しくない昭和の初め、かれは次のような詩を書いて、それに「私の詩」という題をつけた。

私はこれら自分の詩を

素朴なたましいの人々に贈りたい。

……

毎日の悪戦をたたかう人々、

しかも高貴な諦念をもつて生き抜く人々、私は自分の詩をかかる人々に贈りたい。

私の自分の詩によつて

彼らの楽しい伴侶でありたい。

そして彼らと共に生き、彼らのうちに分解され、

彼らの魂と共に未来にむかつて遺贈されたい。

なぜかといえば私は彼らの一人であり、その素朴な善と美にあざかつて生きてきた。そして生活の炉の中で燃えて神の灰となる同じ焚木の喜びと苦しみとに熱中して来た。私は自分の詩を民衆の節くれた手に捧げたい。

この詩は「進歩思想」のさかんだった時期に書かれたものであろう。しかし、ここで「左翼思想」だの「八紘一宇精神」などとイデオロギーの色合わせをする必要はない。喜八の詩は戦前も戦中も一貫して、「私の詩」の精神

で書かれた。山室静氏は喜八が「ヒューマニスト詩人から戦争贊美の詩人に変貌した」と言ひ、「彼のヒューマニズムは自分の深い内部からの裏打ちを欠き……根が浅かったのだろうか」と言つてゐる。喜八のよき理解者である山室さんまでがこうなのだ。

喜八が戦争それ自体を贊美したことはなかつた。その人間愛は根の深いものであり、それは戦時中もたもたれていた。ロランの戦中の生き方と喜八のそれとを比べる人もいるが、本質も成立の過程もまったく違つフランスのユマニズムと日本の人間の情けとを、いきなり比べることはできない。ユマニズムが上で、人の情けが下だと言うこともできない。

親友の片山敏彦がそのような粗雑な比較をした時、さすがに温厚な喜八も堪えきれず、片山と義絶したのである。

しかし、私は冗言を費やしすぎた。喜八自身もこの問題で多少の弁明めいたことを言つたりした。たとえば、散文集『高原曆日』の最初の文「到着」、『詩文集二』の後記、「いたるところの歌」のなかの散文「過ぎゆく時間の中で」などに、それが見られる。しかし、概して喜八は戦争について寡黙であつた。それにもともと何も言つ必要はなかつたのだ。

まだ、戦争のさなか、一九四三年に詩集『此の糧』を出した時、その「あとがき」にかれはこう書いた。

「いざれにもせよ、これらの作品はすべて此の大戦の第一年を通じて私から生まれた私の

詩だ。これらは善きにつけ悪しきにつけ悉く私の本質の刻印を担つてゐる」

これで言うべきことは尽きてゐる。かりにつけ加えるとしても、「夕日の中の樹」の次の四行だけで十分であろう。

好ましい歌 悪しきしらべが

それぞれの風に私から響いた。

その不協和音をふくむ全体の調和が

善かれ悪かれ私本来の叫びだつた。

6

重本さんの本のなかで、戦後の喜八について書いた第七章「花咲ける孤独」、第八章「晩年の仕事」は、第六章「文学者の戦争。戦後責任」に劣らず力がこもつてゐる。

このあたりの事情は喜八自身も書き、一般によく知られてゐるが、重本さんの筆によつて、喜八が「恥を忍び、おもてを伏せて、影のよう」に生き、信州諏訪にも移り住み、そこで地味だがしたたかな生活人の間で自分が愛されているのを知り、詩人として復活していくさまが、簡潔的確に再現されている。

この喜八の反省と再起のありさまは、われわれの心を動かし、深い思いに沈ませる一つのドラマである。そして、それは喜八がいかに誠実だったかばかりでなく、人間としていかにしたたかだつたか、詩人としてどれほどしなやかな生命力をもつていたかをしめす物語でもある。

終戦の年にすでに、名作「告白」を書いていることを考へると、喜八が詩人としての自

分を失つたことは、実は、一度もなかつたのだ
だと思う。この十三行の短い詩を、かれはこ
うしめくくつていてる。

内部には咲きさかる夢の花々を群らせな
がら、

過ぎゆく時を過ぎさせて

遠く柔らかに門をとじている花ぞの、

私だ。

これは敗北感にはほど遠い、不敵と言える
ほどの自負である。その内面の力が、かれの
詩を喜びとしている山村の生活人の心を養分
にして、閉じた門のなかの夢の花園ではなく、
門の外の現実の花として咲き出るのである。

『花咲ける孤独』には戦後十年の詩が収めら
れてるが、これは一分の隙もない詩集であ
り、愚作、凡作は一篇もない。これはまれな
ことである。第一級の詩人でも、その作品の
多くは平凡である。凡作の川底から砂金のよ
うに、秀作をさがさなければならない詩人も
いる。喜八はもともと駄作の少ない人だが、
『花咲ける孤独』を見ると、かれの戦後の創作
がどれほど張りつめたものだったかがわかる。

山室さんはこの詩集について、「高村光太

郎の「典型」のような自虐も傷心もない」と
書き、さらに重ねて「自責と傷心というべき
ほどのものは、ほとんど現れていない」と書
いている。喜八にはたしかに自虐はなかつた。
しかし、傷心はあつた。自責は深いものが
あつた。それは散文にはよく現れている。し

かし、山室さんが『花咲ける孤独』を見て、

「……」には自責がない」と言つたのは、喜八自
身にはむしろ、我が意を得たことだつたかも
しない。『花咲ける孤独』の詩は傷心や自責
にくどくどとこだわつたものではなく、それ

を突き抜けたものだつたからである。

かれはまず生のもろもろの無用なものを突
き抜けた。戦争というマイナスの体験によつ
て、永年求めていた絶対的な核に突き当たつ
たのである。かれの生はすべてであると同時
に、すべてを超えたものになつた。『花咲ける
孤独』のなかに、われわれはこんな詩句を見
いだす。

冬野

わたしはこの暮れゆく晩い土をふんで
わたしの手から種子を播く、

夕日のようにみなぎつて
信頼のために重い種子を。

それは沈む、
深く仕えるもののように、
地底の夜々を変貌して

おもむろに遠い黎明をあかるむために。

きよらかな 澄んだ凝縮が感じられる。

ただ周囲の蒼然たる沈黙のなかで
わたしの心が敬虔な贊歌だ。

惜しまれることを期待もせず、

思い出される明日を願いもしない。

生きる喜びを大空のもとに満喫した身が

今は浅いなんのなきを求めるようぞ。
『花咲ける孤独』の少し後に書かれた「蛇」
という詩では、喜八はめずらしく毒舌をふ
るつてゐる。

晚秋の庭で

「……」には自責がない」と言つたのは、喜八自
身にはむしろ、我が意を得たことだつたかも
しない。『花咲ける孤独』の詩は傷心や自責
にくどくどとこだわつたものではなく、それ
を突き抜けたものだつたからである。

もう私はお前たちをとらえはしない。
私にとつて此の世が絵であり、歌であり、
寓話であり、

象徴であるようになつてから既に久しい。

本国

私は ときどき 私の歌が

何處かほんとうに遠くから
たよりではないかという気がする。

濃い紫の花から金の花粉をこぼす極北、
私の歌はそこに生まれて

森閑と照る深夜の太陽と共に住むのか、

あの宇宙の銀の蜂の巣、
あそこが彼の本国かと。

このように卑俗なものを突き抜けた精神は、
周囲の誤解や無理解を、つまりは孤独を覚悟
しなければならない。喜八はもちろんそれを
知っていた。「夏の花」には、よく知られて
いる詩句がある。

惜しまれることを期待もせず、

思い出される明日を願いもしない。

生きる喜びを大空のもとに満喫した身が

今は浅いなんのなきを求めるようぞ。
『花咲ける孤独』の少し後に書かれた「蛇」
という詩では、喜八はめずらしく毒舌をふ
るつてゐる。

君たち、私に遭遇するや

たちまちいわれもない憎しみと
不条理な恐怖とに痙攣して、

……

必殺の杖や石をかまえる者よ！

……

私にとつて楽しく快い自律の動きが

君たちにはそれほど厭わしく堪えがたいか。

こうした生の領域で突き抜けた喜八は、詩の言葉や詩の形式の領域でも突き抜けた。か

まびすしい現代詩論争や、新旧対比は喜八にはどうでもよいことしかなかった。喜八を現代から取り残された老詩人とみなすものはたくさんいたが、それならそれでかまわなかつた。自分の詩は現代を含みながら現代を超えたものだと、現代とは過去から未来へ絶え間なく時間のなかの一瞬などと、わかれきつた子供じみたことを言う必要はなかつた。

それに、喜八の孤独は文壇や詩壇のものでしかなかつたし、かれは初めから詩壇などには入つていなかつた。読者の世界で喜八はけつして孤独ではなかつた。かれは霧深い信州の山間の土の肌に、自分の歌がしみこんでいるのを自分の目でたしかめたのである。その「孤独」は枯れゆく孤独ではなく、花咲ける孤独であった。重本さんがこの詩集の題名を、そのまま自分の本の題名にとりいれたのもうなずける。

だから、喜八の晩年は心静かで、幸せなものだつたに違ひない。死がもう見えていた時

に、かれは「夏への準備」という意味深い題

の詩を書き、こんなふうに歌うことができた。

あやまちの記憶と悔いの心とは

この世の風光と別れる時に私の持つてゆく

荷物だ、

いつか清めの星が生の最後の夕かけに
救いとゆるしの柔らかな涼しい光で

新しい旅のゆくてを照らし出すとき。

家の土台を洗い、その周囲を掃き清めて、
なお生きて住む日を紛れないものにしよう。

花たちの種を托した砂には如露の水の霧を
降らせ、

木々の古い蜘蛛の網をはらい、茂った枝を

刈りこんで、
明日へつなぐ希望や善意の証しとしよう。

これは自分の精神の果実である作品が、自分

の肉体より長い生命を持つという明るい確

信である。そして、その確信は今実現してい

る。しかし、どんな花園もなおざりにすれば荒れすさむ。私たちはそれを守り、手入れしなければならない。

その仕事をみごとにたしてくれた重本さんには、心から「ありがとう」と言おう。夫人の實子さんと令嬢の栄子さんについて書く次の作品の成功を祈ろう。

そして、重本さんとともに、私も尾崎喜八の名を忘れない。その詩を、その自由な散文を、その人柄、その生き方を忘れない。

編集付記

筆者藤沼貴氏は早稲田大学露文科教授。一九五五年十月、第十四回潮賞ノンフィクション部門を受賞された重本恵津子氏の『花咲ける孤独』——評伝尾崎喜八の書評を同人誌「群青」に寄稿されたものを藤沼氏、群青編集部にお願いして、尾崎喜

八資料に転載させていただいた。

*1 「一つの想像」は日本ビクター（株）製造のEPレコード『人類ついに月に立つ』アポロ11号からのメッセージ（非売品）のジャケットの中、解説・串田孫一氏随想「月・心・音楽」と共に掲載されたもの。（一九六九年刊か？）

戦後、時事問題の詩は殆んど書いていない。その中でこの一篇は珍しいものなので掲載した。資料提供堀隆雄氏。

*2 高校講座現代国語「詩のこころ」は昭和四十五年、当時西尚子氏がNHKに依頼して8ミリのフィルムと音声の録音テープを入手、喜八に贈った。喜八没後堀隆雄氏が両方を合せてビデオ化し、現在は尾崎喜八研究会に保存されている。

尾崎喜八落款印

山本陽一

姓 名 印	堂 号 印 (室名印)			形印式の
喜 (喜八の「喜」) 	現況 淡烟艸舍  昭和三十三年 	現況 碧落書屋  昭和十二年 		印影及び印文
(下段は奥付よりコピーしたもの)				
喜 	舍 艸 烟 淡	屋 書 落 碧		印面の書体 (印篆体)
タテ 1.7 cm ヨコ 1.7 cm 高さ 2.8 cm	タテ 2.7 cm ヨコ 2.7 cm 高さ 5.3 cm	タテ 2.6 cm ヨコ 2.6 cm 高さ 5.6 cm		寸印材法の
鉢なし 串田孫一氏 刻者 側款なし	鉢なし 串田孫一氏 刻者 側款なし	鉢なし 藻橈篆 側款		鉢及 び側款

印面構成等について

碧落書屋

漢銅印風のまとめ。生真面目な感じは、界線をまわしたためにもよる。「落」「書」「屋」の印篆体は、標準の形ではなく、使用例が少ないので、側款にある「藻橈」という人が詳らかでないのが残念である。

淡烟艸舍

漢銅印風の、無理のないのびのびとしたまとめ。尾崎先生は「格式をそなえて莊重」と言われる。使用による摩耗度を差し引いても、起筆・收筆・線の太さ等に自然の変化があり、それが印文のイメージを引き立て、串田氏の詩情の発露と言うべきか。なお、書物上での表記は「淡烟草舍」となっているが、「草」の篆書体は「**草**」なので、ここでは印面上忠実に「淡烟艸舍」とした。

上部の横画を右へ、下部のそれを左へ寄せ、左右の空間に変化をもたせ、左右対称の「喜」の字に動きを与えた、軽快でユーモラスな印。しかもその意図を感じさせない。尾崎先生は「縹渺とした趣きがある」と言われる。なお、印材はいずれも石印材。

○尾崎先生の引用文は「新しい印章」（一九六六年五月）による。

○印影——印泥（朱肉）をつけて紙に押捺したもの。

○印文——印画に刻された語句。

○印篆体——漢代の銅印に刻された（鋳造された）篆書体がその代表的な形。横画は水平、縦画は垂直の構成。

○側款——印材の側面に刻された刻者名など

○鉢——印材の頭部に彫刻された飾り。

編集部付記

「碧落書屋」は昭和十二年八月刊『一登山家の思ひ出』より十七年三月刊ヘッセ『畫家の詩』までの六冊の訳本の奥付に、「淡烟艸舍」は昭和三十三年十二月刊の『尾崎喜八詩文集』から、「喜」は昭和四十二年二月刊『私の衆讚歌』から押されている。

「新しい印章」は『私の衆讚歌』『日光と枯草』に収録されているが、ご存知の方の為に載せさせていただく。

筆者は当初からの会員で高校教諭、謙慎書道会理事、読売書法会評議員、共に「篆刻部門」。

新しい印章

今まで使っていたもののほかに、私は近ごろもう一つ別の印形を持つことになった。

字を書かれた時や、自分の著書の特製本の奥付に捺したりする時の印だから、役場に届けてある形式だけの実印や、ふだん色々な受取り証などに使った認め印とは、用途の上で

も品位の点でも違っている。今までのには

「淡烟草舍」とあるが、今度のは自分の名から採られた「喜」の一字である。いずれも友人串田孫一さんの篆刻になるもので、前からの印の書体は格式をそなえて莊重、今度のは古雅でどこかに縹渺とした趣がある。それに形もいくぶん小さいから、旅の際の持ち歩きなどには、そう言つては悪いが特に便利だ。その印材がまた実にいい。冷たく滑らかな四角の立方体は、うすい高層雲の空のようにならへて白く、ところどころに洩れ陽のようないい彩が匂つていている。中国雲南省あたりの産の、上等な蠟石かと思われる。そして底辺一七ミリ平方、高さ二七ミリのこの石印を収容し保護するのに、濃い緑のレース糸細編みの袋をもつてし、その口をレンガ色の細い編み紐でくくるようにしてある。しかもこの袋は串田さんの奥さんの手になるもの。つまりご夫婦の合作ということになる。何という心のこもった手芸だろう！

これこそは私にとって、古い友情の新しい記念でもあれば、もう一つ加わった貴い宝でもある。これを捺して内心に恥じないためには、私から一層よい詩が生まれなければならず、字も今よりも正しく美しく書けるようにならなければならない。性來字の拙い私に書を所望する人が少なくないが、それはそれとして、今私の願うのは、自分の書いた物とそこに捺したこの印とが、私という存在の偽りなき、しかもいくらか美化された証拠となるようについてのことである。

（一九六六年五月）

詩「美ガ原熔岩台地」の校異と特質

嘉 納 忠 明

うつくし はら
美ヶ原熔岩臺地（初出）

（『日本詩』 S 9・10）

うつくし はら
美ガ原熔岩台地（定本）

（『尾崎喜八詩文集2』 S 34）

1 登りついて不意にひらけた眼前の風景に啞然とし、

2 しばらくは世界の天井が抜けたかと思ふ。

3 やがて一步を踏みこんで岩にまたがりながら、

4 此の高さにおける此の廣がりの把握に尙もくるしむ。

5 無制限な、大まかな、荒っぽくて新鮮な

6 この風景の情緒はたゞ身にしみるやうに本原的で、

7 尋常の尺度にはまるで柵が外れてゐる。

1 登りついて不意にひらけた眼前の風景に

2 しばらくは世界の天井が抜けたかと思う。

3 やがて一步を踏みこんで岩にまたがりながら、

4 この高さにおけるこの廣がりの把握になおもくるしむ。

5 無制限な、おおどかな、荒っぽくて、新鮮な、

6 この風景の情緒はただ身にしみるやうに本原的で、

7 尋常の尺度にはまるで柵が外れている。

8 秋が雲の砲煙をどんどん打上あがて、

9 空は青と白との眼もきめるだんだら。

10 物見石の準原から和田峠の方へ

11 羽の鷺が鎧矢のやうに落ちて行つた。

8 秋が雲の砲煙をどんどん上げて、

9 空は青と白との眼もきめるだんだら。

10 物見石の準平原から和田峠のほうへ

11 一羽の鷺が流れ矢のやうに落ちて行つた。

山国の大野原のほぼ中央に当る松本

は、西の常念、蝶ヶ岳などの北アルプスが連なり、東に美ヶ原、鉢伏山など

の高原山地が横たわっている。その山

岳と高原は登山や自然を愛好する者達の魅惑に満ち、四季を通じて大勢の人

が訪れる。

美ヶ原は壯觀な四囲の眺望、広大な

高原の情景に於て殊に優れている。そ

の高原の中央に「美しの塔」と呼ばれる避難塔が建っている。塔には悪天候の時位置を知らせる鐘が吊るされ、美ヶ原開発の功労者山本俊一翁の胸像があり、外に廻れば尾崎喜八の詩「美ヶ原熔岩台地」が自筆のカタカナ体でレリーフになって嵌められている。

美ヶ原のガイドブック、或は長野県の文学案内の殆どにその詩が採り上げられている。深田久弥は『日本百名山』の「美ヶ原」で、「高原の中で第一に挙げたいのが美ヶ原」であり、「そのままは尾崎喜八氏の『美ヶ原熔岩台地』にみごとに歌われている」と述べ、詩の前半を掲出している。恐らく、「美ヶ原熔岩台地」の鑑賞に於て、深田久弥の記述で十分であろう。すでに詩は大勢の人に親しまれ、好まれてることを思うと今更異を唱えたり、附け足す必要などない、と思われる。しかし、書誌研究を通して作品の独自性や「美しの塔」との関わりに触れていると、類書の補足もあながち無駄ではないと思われ、二、三の小考を試みることにした。

(一) 作品の校異

(イ) 校異資料

- ①詩誌「日本詩」S 9・10 (初出)
②「書窓」(自筆) S 10・9
③『現代詩人集・5』S 15
④『二十年の歌(序・S 17・6)』
⑤『高原詩抄(序・S 17・7)』
⑥『尾崎喜八詩文集・2』S 34

註 ④⑤は刊行時でなく、編輯時

最初に、初出と定本を比べ、順次、前発表作との異同を記す。

- (1) 初出①と定本⑥との大きな違いは、第一連一行の終り、「風景に啞然とし」の「啞然とし」を削除し、第二連三行の「準平原」(初出の「準原」はミス・プリであろう)のルビ、ペネプレーンを取る。第二連四行の「鎧矢」を「流れ矢」に変える。尚、「羽の驚が」は初出の第二連四行、「羽の驚が」は「羽の驚が」のミス・プリである。

- (2) 第二連四行を「あ、十月／おほきな抛物線を描いて」と新たに一行を加え、第二連は五行になる。

- (3) ③に於て第一連一行の終り、「啞然とし」を削除。第一連五行、「大まか」を「おほどかな」に、「荒っぽく」を「荒々しくて」に変え、「おほどかな」の所で改行し、一行増しと

連四行の全句を削除し、四行になる。とすれば、表題に含まれた「熔岩台地」、第二連最終行の「鎧矢」が「流れ矢」になる。

(5) ④は③と目立つた違ひはない。

(6) ⑤に於て、第一連五行は④の五行六行がつながって一行となり、「荒々しくて」が「荒っぽくて」と元に戻る。

(7) ⑤の第二連三行、「準平原」のルビ、ペネプレーンを取る。

(8) ⑤と⑥との違いは第二連三行の「方へ」を「ほうへ」と平仮名にする位で、⑤『高原詩抄』で固まつたことになる。そして⑥『詩文集・第

二卷』では現代仮名遣いに改めて定本となる。

(二) 作品の考察

「美ヶ原熔岩台地」を読んで先ず感じることは、高原の季節や地形の印象が鮮やかに伝わってくることである。詩人は自己の感情や言葉を剥き出しにせず、専らに眼前の対象を驚きの眼で追っている。

詩人は『旅と滯在』(S 8)の時代

に、リルケから過度の叙情を抑制して即物的なもの、結晶的ならしめる詩法(『詩文集・2』後記)を学び、「物」

それ自体に歌わせることを知った。

「美ヶ原熔岩台地」は昭和九年の発表

當時、美ヶ原を紹介する文章は未だ少なかつた。そこに使われている地名

は殆ど「美ヶ原」で、今日普通になつてゐる「美ヶ原高原」の表記も見当らない。そんな中で詩人が用いた「美ヶ原」の表記は特異であつたのではないか。

先に詩人は『旅と滯在』の時代にリルケから即物的対象把握を学んだこと

連四行の全句を削除し、四行になる。とすれば、表題に含まれた「熔岩台地」、第二連三行の「準平原」の地理学用語である。

「熔岩台地」は流動性の大きい熔岩流がつくった平坦な台地で、浸食や隆起によって高原状になる。谷に向う斜面の上端には熔岩層が現われ、絶壁をつくつたりする。美ヶ原では三城牧場の上部一帯、王ヶ頭から王ヶ鼻にかけて絶壁をつくり、岩石の径を登つて行く者は「登りついて不意にひらけた眼前の風景」に驚きの眼を見張つて、「熔岩台地」ならでは印象を強く受けることになる。

「準平原」(ペネプレーン)は浸食のために山は地域全体が低平になり、ゆるやかな起伏が波打つだけになつた平地を言う。(5)の推敲でルビのペネプレーンを外したが、当時の英語規制からだけではなく、漢字の読みの方がなだらかな高原のさまを想像できると思われる。このように詩人は地理学を引いて地理学用語に関連して、表題の「美ヶ原熔岩台地」の表記について考えたい。

當時、美ヶ原を紹介する文章は未だ少なかつた。そこに使われている地名は殆ど「美ヶ原」で、今日普通になつてゐる「美ヶ原高原」の表記も見当らない。そんな中で詩人が用いた「美ヶ原」の表記は特異であつたのではないか。

を述べたが、一方その頃は自然科学吸収の旺盛な時でもあった。山や自然に近づくに伴い、対象を理解する科学的知識の蓄積は増していく。

地形や景観を扱った地理学は辻村太郎博士の著作を元に、「地形学」(T12)『日本地形誌』(S4)『新考地形学・二』(S7・8)等を順次学習する(「山にゆかりの先輩」『私の衆讃歌』S42)。先に挙げた地理学用語もこの中に出てくる。

ところで、「美ヶ原熔岩台地」の表記はこれら辻村博士の著述に見当らず、「熔(鎔)岩台地」の例示に「美ヶ原」は挙がっていない。

詩人はその表記をどこから得たのか。

詩人が「美ヶ原熔岩台地」を発表した同じ頃、雑誌「山」は昭和九年十月号を全誌、「高原」特輯に当てている。これはその後の類書にもみられない質量共に画期的な編輯であった。

同誌に辻村博士は「高原の意味」を寄稿しているが、「美ヶ原」には触れていない。

「編輯後記(高原雑記)」の中で石原巖氏は、「美ヶ原などは準平原面を蔽つて順次噴出した安山岩質の熔岩台地と謂はれて居ります」と記している。石原氏は辻村博士の同室の地理学者であった。

辻村博士のその後の文章、「霧ヶ峰を訪ぶ」(『帝国大学新聞』S9・12・10号、『晚秋記』S15)をみると、本州中央部の高山を展望する好位置の一つに

「美ヶ原の熔岩台地をこの中に数へて宜からう」というくだりがある。先の石原氏、この辻村博士の記述は、美ヶ原が熔岩台地であり、詩人の表記が誤りでないことを示している。

ところで詩人は雑誌「山」に早くから寄稿していたから編輯者の石原氏を知っていたらしく、辻村博士には熱心に私淑していたから、活字以外のところで二人から美ヶ原を含めた地理学の知識を得る機会は十分にあつたと考えられる。因みに詩人は雑誌「山」の終刊号に、詩「高原の晩夏に寄せる歌」を寄稿している。その原稿に石原氏への献辞を添えていたところ、石原氏は辞退して掲載されなかつた。

一方、詩人は「美ヶ原熔岩台地」の表記を他で使用していないだろうか。

先の雑誌「山」の高原特輯号に、詩人も「たてしなの歌」(『山の絵本』S10)を寄稿している。

この文章の初めに、蓼科山へ同行した義弟の故郷を回想する中で、「西の方にきらきら光る逆光につかつた半透明の美ヶ原熔岩台地」と同じ表記が出てくる。これは初めての使用のようである。

同誌の「編輯後記(高原雑記)」の中で石原巖氏は、「美ヶ原などは準平原面を蔽つて順次噴出した安山岩質の熔岩台地と謂はれて居ります」と記している。石原氏は辻村博士の同室の地理学者であった。

崎喜八詩文集・4(19頁)。この引用した個所は、将しそう詩「美ヶ原熔岩台地」の詩的表現を散文で抽象的に述べたものである。

この二つの記述は、同時に発表された散文「たてしなの歌」と詩「美ヶ原熔岩台地」との間に、近しい投影があることを示唆している。

先に詩人は自然科学の吸収に力を注いでいることを述べたが、高原を巡るの知識を得る機会は十分にあつたと考

えられる。因みに詩人は雑誌「山」の終刊号に、詩「高原の晩夏に寄せる歌」(S8)等の文章をみると、地理学の成績は年を経て拡充され、「たてしなの歌」(S9)では一方の主題である高原

歌を展開するに至つた。

「たてしなの歌」の前に発表した「ハイキング私見」では、科学的知識に

よつていかに自然から豊かな富が得られるかを自己の経験とその方法の一端を述べている。詩人にとって「たてしなの歌」の頃は、自然科学攝取の高潮期であつたのである。

これまで「美ヶ原熔岩台地」の表記に関連して種々述べてきたが、明確な典拠は得られなかつた。(註、学会専門誌は検索していないから断定はできな

い)

一方、それが詩人の造語であることの許に立ち、悠容たる山々の起伏の大観から「自然の原始性と無際涯の感じとから、さらに最も靈妙な根本的情緒を無限に包蔵している単純さ」から、

した適切な用法が、詩人の視ることの詩「美ヶ原熔岩台地」は散文「たてしなの歌」とともに、自然科学の協奏の下に生まれた詩人独自の傑作の双子であろう。詩人は、「たてしなの歌」は「自分のものを打ち建てた」(『山の絵本』の思い出)『日本山岳名著全集』月報2(S37・6)作品と言う。

詩「美ヶ原熔岩台地」の成立に関連して一、二附け加えることにする。作品が昭和九年十月号の詩誌「日本詩」に初めて発表されたことは、既に述べた。ところで、詩想を得た美ヶ原行に關わる記述や記録が見出せないのである。

詩人が美ヶ原の地名を使うのは既述したように、「たてしなの歌」が初めての頂きから北西に展開した信濃中央高

台の夢のよくな広袤」と、美ヶ原をして憧れるかのように書いている。その霧ヶ峰行は昭和九年三月(喜八撮影写真のデータによる)である。

先に「たてしなの歌」と「美ヶ原熔岩台地」は密接な照応の中で同じ頃に創作された、と述べた。「たてしなの歌」の季節は晩夏から初秋、「美ヶ原熔岩台地」は秋、そして蓼科山行は昭和九年八月二十一日と分つてのことから、美ヶ原にはその後間をおいて出かけた、と考えられる。

一方、それが詩人の造語であることの許に立ち、悠容たる山々の起伏の大観から「自然の原始性と無際涯の感じとから、さらに最も靈妙な根本的情緒を無限に包蔵している単純さ」から、

とも書いている。尾崎さんはあの美しくも素朴な詩情で「さすらひと知見の旅」の中にはじまり幾度も美ヶ原をたえていた。私はこの二人のすぐれた「山の文人」の何れかの一文を得て、この塔の正面にリリーフとして生かしたいと考え、長いこと思案して見た末、

美ヶ原には矢張り尾崎さんの「詩」がピッタリくるように思われた。

そして尾崎さんの「さすらひと知見の旅」の中にある「春の美ヶ原」の一節で、多くの山岳人に親しまれている「空は漠々と雲を増して、太陽の姿はもう見られなかつた！」というくだりを抜いて東京の尾崎さんにお許しを願う書面を出した。果して何と返事をされることかと心配していたところ、六十数歳とは思われぬ水々しい、そして几帳面な文字でお手紙をいたゞいた。老詩人は「いろいろと反省してみましたが、やっぱり御引きうけすることに決心いたしました。美ヶ原は私にとって忘れるのできない懐しい地ゆえ、その高い静寂の空間に自分の愛と驚異との述懐が永くとどめられることは思ひだにしなかつた喜びでもあれば感激であります」と、書きはじめてある。

私はこのような謙虚なお許しを得て全く恐縮してしまった。そしてリリーフ

にはお願いした文よりも、その翌年再遊の折の作詞の方が山の特質をより多く表現しているよう思うと書かれ、その詩を書いて同封してよこされた。

私は一も二もなく、その方を探ること

にしたのだが、尾崎さんは今、それをおもに書いた書は片仮名表記である。

そこで題名は本来の詩の題とは違いいがあって熔岩台地を取つたのか家

族の我々にはそのいきさつについては記憶がない。遺品の中に碑文のために書いた書と同じ形式で平仮名表記のものがあった。それも同じよう美ヶ原となつてゐる。

これは全くの推測であるが、父は最初碑文を平仮名表記で書き、厳しい冬の風雪にさらされ、深い霧に埋もれる碑としてその自然の厳しさをも併せて表現するにはカチツとした片仮名表記の方が適切だと考えたのではないかと想像しているのである。平仮名表記の半折は信州富士見町の「高原のミュージアム」に展示されている。

尾崎栄子

美ヶ原の表記は「美ガ原熔岩台地」に限り、定本『尾崎喜八詩文集卷2』に従つてガとし、今は現在通常に表記されているケとした。

編集部

美ヶ原の避難塔にはめこむリリーフ

の為に書いた書は片仮名表記である。

そこで題名は本来の詩の題とは違いいがあって熔岩台地を取つたのか家

族の我々にはそのいきさつについては記憶がない。遺品の中に碑文のために書いた書と同じ形式で平仮名表記のものがあった。それも同じよう美ヶ原となつてゐる。



美しの塔 リリーフ

尾崎喜八とフランスの作家たち

——喜八宛書簡を通して—— その一

中原好文

最初に——尾崎先生のこと、そして「喜八宛書簡」の意味

最初から私事に亘って甚だ恐縮であるが、私は山岳部に属し、時間の大半を北アルプスを中心とした山登りに費やすといった松本での高校生活を終えると、上京して早稲田大学の露文科に入学した。そしてトルストイを勉強するかたわら、春と夏の休みには郷里の信州に帰り、高校の後輩たちとともに北アルプスの峰々を徘徊するというような生活を続ける中で、露文科二年の春、上高地でのウエストン祭の折、長年の憧れの的であった『山の繪本』の詩人『一登山家の思ひ出』の翻訳者、尾崎喜八先生の知遇を得た。その時、たまたま持っていて、先生から「上高地でお会いした記念に・尾崎喜八」と署名していただいた角川文庫版の『一登山家の思ひ出』は、その後上野毛のお宅にお伺いするようになってから頂いた何冊かのご著書や色紙とともに今も大切に秘蔵している。先生と實子夫人に同行しての上高地旅行、先生のお供をしての木曾旅行、栄子さんや美砂子さんをご案内しての表銀座の縦走、そして何より、ある年のクリスマスイヴにお招きにあずかり、その夜の夢のようなことなどを記した美しい文章を『友への手紙』(『尾崎喜八詩文集』第八巻所載)という形で、NHKのラジオを通して放送して頂いたこと等、思い出はつきない。今もつて深い感謝の念とともに思い起こすのだが、先生から受けた恩恵の最大のものの一つは、戦時の苦い体験を超えて、終生、その言葉の

最も深い意味でのロランディストであり続け、ロランの精神の眞の体現者であつた先生が、人生の岐路を前にして、あてどんの無い彷徨にてその行く手を指し示して下さったことである。安保条約の改定を前に、基地闘争が燃え上がり、教室では連日のようにクラス討論が行われるといった、当時の窒息的な雰囲気の中で、露文科卒業を前に、私は丈余の雪に閉ざされた上高地帝国ホテルの番小屋に閉じこもり、吹雪の咆吼に怯えながら、「戦争と平和」試論なる卒論を書き上げたが、政治に向かられた顔を文学の方に引き戻してみても、このヤースナヤ・ポリヤーナの老聖者が、その激烈な思想の果てに身をもつて示して見せたものが、頭陀袋を背負つての家出と野たれ死にとであつてみれば、救いのあろう筈もなかつた。ロランについては、高校時代に豊島与志雄訳の新潮社版で『ジャン・クリストフ』を読んでいただけだが、その時の感動が心に残っていたからであろう、辞書を引きながらなんとかフランス語が読めるようになつていた私は、その頃たまたま入手したオデット・リシェの仮訳になるツヴァイクの『ロマン・ロラン、人と作品』を読んで強烈な印象を受けた。殊に、人生や芸術に悩みを抱いた青年ロランが、助言を求める手紙をトルストイに書いて、トルストイが「目に涙を浮かべて」その手紙を読み、「親愛なる兄弟よ」という呼びかけで始まる長文の返書を認め、この手紙がその後のロランに大きな影響を与えたこと

などを記した本書の最初の部分、「遠方からの伝言」を読みながら、私は訳もなく感動した。

その感動のよつてきたる所以のものはまた、ロランの生涯と作品の中には、その思想の展開と精神の遍歴とが、「家出」というような困難な帰結に至りつくのを回避させてくれるよう何らかの生き方を解き明かす鍵が隠されているのではないかという期待感によるものでもあつた。そして何より私の眼の前には、トルストイの『復活』とロランの『ジャン・クリストフ』によって文学の世界に身を投じ、幾多の変転の後に、今まさに、人生の晴れやかな夕映えの中に毅然と立つて、言葉の華麗なアラベスクを織り上げている詩人の生きた手本があつた。詩人はこう書いていた。

「荷風の情痴と韜晦にも飽き、鷗外の『あそび』にも物足らなくなつて久しい私が、文学者志望のためには両親との離別も止むを得ないと密かに心に決しながら、其頃漸く魂を打ちこみ始めたトルストイやロマン・ローランへの熱烈な傾倒、わけてもその『復活』と『ジャン・クリストフ』とは、その私が、もはや二つとない心の糧とも泉とも火とも鞭とも信じながら、飽かず繰り返す聖書だった」(『渝らぬ感謝』新潮社版『世界文学全集』月報6、「尾崎喜八資料」第3号所載)、と。また詩人はこつも回想している。「ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』。これは私にとつて二十歳代の天啓の書であり、太陽であり、其の後三十数年を通じて常に変らぬ精神の鼓舞の力、心の糧となつてゐる」。そしてまた「ロマ

ン・ロランを精神の父とも慕い、その最も愛をこめた数々の手紙を秘蔵している私」(『碧い遠方』「冠着」とも述べている。私はこの生きた手本に導かれるようにして、露文科を卒えると、仏文科に再入学し、ロマン・ロランを学んで、詩人の師であるこの偉人に、「偉大さの淵源」という卒論と、「パリ・ローマ・パリ——ロマン・ロランの青年時代——」という修士論文とを捧げた。大学院を了えると、二年間パリに遊び、モンマルヌ街にあつたロマン・ロラン文献所に通つて、ロラン夫人マリー・クーダチエワにも親しく接し、さまざまに便宜を受けたが、「日本の詩人尾崎喜八」については、遂に語ることがなかつた。詩人がロランの再婚の相手であるマリー・クーダチエワといふこのロシアの女性に対して抱いていた、ある特殊な感情について、詩人は自身の口から直接聞き知つていたからだ。それは詩人がロランの妹マドレーヌの死に寄せて了一文からもそれとなく感得されるところのものもある(「私たち、ロマン・ロランへの共通の心情でつながつてゐる者たちは、甚だ精力的活動的でかなりやりてのようにな想われるマリー・ロラン夫人と、その一生を令兄のために捧げつづけた高貴で優しくつましい老マドレーヌとの間が、必ずしも親身のもののように行かないのではないかという氣懸りを常に持つていた」「野外と屋内」、「マドレーヌ・ロランのこと」)。そしてこの感情は、マリー・ロラン夫人が、日本人宛のロランの書簡集を編むに当たつて、片山敏彦氏に手紙を

送り、ロラン書簡の取り纏めを依頼して来た際、夫人のその手紙の中に、「カタヤマはオザキの戦時中の行動に反対すべきであった」といつた主旨の文言が記されていたらしく、書簡寄託の依頼とともに、そのことを片山氏が詩人宛の私信にわざわざ書いて来た時、先生が覚えた激しい怒りの感情(そのことについて記した文章をどこかで読んだ記憶があるが、どこでかは定かでない)に通ずるものでもある。そうした先生の感情についての私のわだかまりは、マダム・ラネーというインド研究家のサロンで、たまたま面識を得たエミール・ゾラの孫娘の数学者から、マルセル・マルチネの未亡人を紹介された時にも顔を覗かせた。恐らく、これは私の単なる小心と、詩人の心情に対する的確な判断の欠如に由来するものであり、その真情に添うものでは必ずしもなかつたであろうが、今となつてはやむを得ない。蜜月時代の男女の親密な交情を連想させずにはおかしいような深い友情で結ばれ、数々の熱烈な書簡を交換しながら、戦時中はロランと百八十度反対の道を取り、逃亡先のチロルの修道院でその生涯を閉じたアルフォンス・ド・シャトーブリアンの例(先生もそのことに触れておられるが)を持ち出すまでもなく、『高原暦日』の「到着」に描かれた「煉獄」を経巡つた後、緩やかな「回復期」を辿り、ジャン・ジオノに捧げられた「店頭の青げら」に記された喧騒と混乱と猥雑を遠く見据えて、自己の復活と再生を搖るぎないものとして確立し、「好ましい歌 悪しきしら

べが／それぞれの風に私から響いた。／その不協和をふくむ全体の調和が／善かれ悪かれ私本来の叫びだつた」との諦観と悟りを踏まえて、「孤独の絢爛」を遠く織る詩人であつて生まれた私の心のわだかまり等、何ほどのことでもなくなつていたに違ひない。いずれに抱いたある種の感情や、それに触発されて生まれた私の心のわだかまり等、何ほどのことでもなくなつていたに違ひない。いずれにせよ、私は一年間のラヌス滞在を終えて帰国したが、帰るとすぐに巻き込まれた或る一身上の大混乱の中で右往左往し、先生をお訪ねする日を日一日と先に延ばし、日が月に、月が年に変わる中で、先生は他界してしまわれた。先生はその最晩年のご著書、『音樂への愛と感謝』の中の「ベートーヴェンの誕生日に」の章において、「机の上から私の毎日の仕事を見おろしているそのマスクは今フランスへ留学している若い友人から或る年のクリスマスにプレゼントとして贈られた物」と記しておられるので、私は先生の中で今もつてフランスをさ迷う旅人の姿を保つていてことになる。痛恨の思いとともにヘマア・クルバ！（我が咎によりて！）を述べねばならない。その後、先生のみ靈の導きによるものであろうか、栄子さんとの偶然の出会いから、私は再び先生のお宅にお伺いさせて頂くこととなつた。そして数年前、日本ヘンリー・ミラー協会の機関紙に、ジャン・ジオノについて書く必要に迫られた時、以前、先生にお話をお伺いして、その存在を知っていた、ジャン・ジオノからの手紙を見せて頂く機会をもつた。同時

にまた、書斎に保管されていた、先生宛のフランスの他の作家たちの手紙も拝見し、後日これらのコピーをお送り頂き、それを日本語に訳出する作業を託された。その後、先生のお宅が火災で全焼し、それらの手紙そのものは灰燼に帰したが、幸いそのコピーだけは私的手元に残つた。現在嘉納忠明氏の手で、先生の文献資料の発掘が精力的に進められており、その成果を踏まえて、氏は「尾崎喜八、訳詩の精神史」という優れた論文（「尾崎喜八資料」第十号）を発表され、その中で、先生の作品の解説に当たつて、ヨーロッパ文学の受容という問題がいかに重要な位置を占めるかを指摘されているが、例えは、これも嘉納氏の発掘による先生の詩、「藤の花房」（ジャン・ジオノからの手紙）をそのまま詩の素材として用いていることを知つたり、また『書窓』の昭和十年六月号所載の「大陸をこえて」といった文章の背景を理解したりといつたごく卑近な事例から始まつて、『音樂への愛と感謝』の中の「安らかなる眠りのために」や「わが慰めの音樂」、「ヴィルドラックの死」や「善に通ずる美」といった美しい文章のより良き理解のためにも、先生宛のフランスの作家たちの書簡の公表は十分な意味と価値を持つであろう。そしてなにより、これらの書簡群は、ヨーロッパ文学の受容において先生の果たされた役割、強い

なるであろう。私たちは詩人としての先生の活動、取り分け若い頃のそれが、抜群の語学力の裏打ちをもつて、ヨーロッパの文学、特に詩の、今までに沸騰しているその増殖の中心と直接結びついているという感覺、またそこから生まれる自負と矜持に支えられていたことを知つているが、これらの書簡群はまたそのことを証すであろう。現在手元にコピーの残つている先生宛の書簡の内訳は次の通りである。マリー・ロラン夫人からの手紙一通、ジョルジュ・デュアメールからの手紙一通、デュアル夫人からの手紙一通、シャルル・ヴィルドラックからの手紙十五通、マルセル・マルチネからの手紙十通とフランスでの未刊行詩数篇、ジャン・ジオノからの手紙二通、ベルタ・シュライヒャーからの手紙三通、リュック・デュルタンとジャック・ドラマンからの手紙それぞれ一通、ロート・アプフェル出版書肆からの手紙一通、詩人や作家たちからの寄せ書き二通の他に、ジャック・ドラマンに宛てた先生の書信のタイプ打ち下書き一通がある。一方、先生がその存在に言及されているにもかかわらず、紛失したか戦災で消失したか、その書簡の見出されないジャン・リシャール・ブロック、ルネ・アルコス、ピ埃尔・ジャン・ジューヴ等の作家の他、先生の手でその書簡が訳載されているにもかかわらず、現物の見いだされないレオン・バザルジエットのような詩人（「大陸をこえて」参照）もいる。先生宛書簡の中で質、量ともに最も重要な位置を占めるロマン・ロランか

か日本の「ロマン・ロラン友の会」に寄託されているらしく（いずれ訳出するロラン夫人の書簡参照）、現物がない上に、みすず書房版のロマン・ロラン全集第三十六巻『日本人への手紙』に訳載されているので、ここでは扱わない。これらの手紙のうち、一九四八年十一月二十三日の日付けのあるマリー・ロラン夫人からの手紙と、一九五三年十月三日の日付けをもつブランシユ・デュアメル夫人からのものを除くと、他の書簡はすべて戦前に属する。今回は、数こそ二通と少ないものの、先生のお仕事の中で、ヘッセとともにその訳書の数が最も多く、それへの言及の頻度も、ロランに次いで多いデュアメルからの手紙を取り上げ、必要に応じて、若干の注解を加える。尚、以下の文章においては、尾崎先生をも含め、敬称はすべて省略させて頂くことをあらかじめお断りし、前もってお詫びしておこう。また、訳語について一言述べるならば、例えば、「親愛なる尾崎」は「拝啓」に、「どうか君の友人の誠実な気持ちを受け取ってくれ」と「敬具」に、というように、それらの表現を、日本における書簡の書式と慣例に従つて処理することも可能な訳だが、これらの文言も一概に儀礼的な表現とのみは言えず、筆者の感情の微妙なニュアンスを伝えるという面も持つので、可能な限り直訳を旨としたことを言い添えておく。

(一) 喜八宛デュアメール書簡

〔宛先その他〕シベリア経由・日本・東京・

京橋区四日市町五番地・尾崎喜八様・消印一八
リ・ナリヌテレリツソ沢郡更局・1930年

「幾言地」 フラノス・パリ五
月 29 日 19 時

街二一八番地

【注解】この手紙には喜八自身の手になる訳文があり、しかもそれはどこかに掲載されたものらしく、活字印刷されている。ここではその訳文をそのまま掲げる。

一九三〇年十一月二十二日

新しい星崎と云ふが翻譯家のことを心配してくれ給うな。もしそれが君の仕事の助けになるならば美は欣んでその翻譯権を君にあづけてくれる。

なるならば僕は欣んでその翻譯権を君にあげる。僕はこの美しい仕事を君に感謝している

譯してくれるなら僕は嬉しい。本が出たら贈つてくれることを忘れないように。

君は君自身の仕事をやっているのか、手紙をくれる時にそのことも少し聴かせてくれ給へ。僕及び僕の家族からの親愛な挨拶を君の御家族みんなへ。

君の友

〔その2〕
「宛先その他」書留便（書留便・ヴァルモン
ドワ局N。211の証票あり）シベリア経由。
日本・東京・京橋区四日市町六番地・尾崎喜
八様・消印判読不能

〔注解〕番地が前回のものと一番地違っている。
「書留」は写真等同封のためか。

〔発信地〕フランス・セーヌ＝エ＝オワーズ
県・ヴァルモンドワ、ラ・ナーズ、「新しい家」

〔注解〕この手紙についても、その一部が、「大陸をこえて」（『書窓』昭和十六年六月号、「尾崎喜八資料」第三号参照）に翻訳引用されているので、その部分は「」で括り、参考までに喜八訳を後に掲げる。

一九三一年六月十日

親しい尾崎、『光』の日本語訳落掌。だが悲しいかな、日本語についてあまりにも無知なため、君の仕事の美しさを正確に推し量ることができるに残念だが、君がこの小さな本の中に、友情の最も美しい花の数々をちりばめ、熱烈な心、詩人としての心から生まれた全幅の気配りと全幅の愛情とを注ぎ込んだことだけは見てとれる。君に心の底からお礼を言う。このさきやかな作品は私の書斎の特別な場所に飾られるであろうが、それはこの作品の中に私の一部が含まれているからではない、それが私のもとに連れてきてくれた君の

一部であるからだ。「私は仕事に忙殺されるい

る。陽気は暑く、蒸しむしして、今にも雷雨が来そうだ。それでも庭は一面或るかぐわしい花の盛りで、すつかり青く染まっている。

その見本を同封する。庭には日本の花も沢山

ある。しかし此處では、どんな花でもそれが

非常に美しいというだけで、私たちはすぐさまそれを日本の花にしてしまう。君が愛するすべての人達の幸せを祈っている。どうか君の友人の誠実な気持ちを受け取ってくれ給え。

デュアメル

(喜八訳)「私は仕事に圧し潰されてゐる。陽気は暑く重苦しく、雷が威嚇する。それでも庭は或る花の盛りで、すつかり碧くなつてゐる。その見本を同封する。()庭には日本の花もかなりある。しかし此處では、君達が日本を見るのと同じ位美しいのが一輪でも咲ければ、それで満足しなければならない。」

尾崎喜八文庫などと呼ぶのには恥しいようないいスペースである。焼ける以前は一、二階で四十坪ほどの家であつたが、再建された家は諸事情でそれよりもずっと小型で一階は十四畳と八畳の二部屋とその他となつていて、十四畳と八畳分ぐらいが仕切りなしで尾崎喜八のものを展示、収納し、同時に書籍や資料を観る事が出来るようにテーブル・椅子が配置してある。残りの部分は家族と懇談する場、茶菓をもてなす場となつていて。

書棚には喜八の自著、訳本が収納され、展示棚には焼け跡から取り出され修復したブロング像や、集められた特装本、災禍を免れた自筆のノート、地図等が飾られている。

窓を広くとつてるので壁面が少ないが、それでも写真の額、色紙等が展示してある。

「注解」(その1)の手紙で言及されている「翻訳権」がどの作品に関するものであるのかは不明。『未来生活の諸情景』が喜八の手で訳出されることはなかつた。(その2)の手紙に見える『光』は『世界戯曲全集35・フランス篇(5)仏蘭西現代劇集』に訳載されている四幕ものの戯曲を指す(「尾崎喜八資料」第六号参照)。(つづく)

研究会だより

尾崎喜八文庫について

尾崎栄子

すべてではないが殆んど掲載紙別にファイルされ、自筆の原稿類とともに戸棚・引出しに収納してあり別に目録が造つてあつて、ご覧になりたいと思う物を係(と言つても私一人しかいないが)に申し付けて下されば中央のテーブルで読む事が出来る仕組みになつている。

音楽関係は現在尾崎家で購入可能な範囲で音の良い機器・スピーカーをとりつけ、愛蔵の沢山のレコードを焼失してしまつたので、せめてバッハだけでも全曲CDで揃えておきたいと、小学館のバッハ全集を購入中である。雑誌「アルプ」全巻、雑誌「白樺」二十八冊をそれぞれご寄贈いただき、書棚及びアルプの棚に納まつており、最新の「高村光太郎全集」も北川太一氏のご好意で全巻揃つていて。

喜八の自著、訳本は堀隆雄、石田二三夫両氏が蠟梅忌参加者に呼びかけて下さつたり、古書店巡りをして集めて下さつたお蔭で現在九五%揃える事が出来た。

写真類は富士見に記念施設を造る時、町側の要請で二百数十枚の写真の複写を許可したが、そのフィルムを借りてキャビネ判に伸ばし収容してある。喜八が昭和六年頃から数年間、乾板式カメラ、イコンで撮つた写真のイ

ンデクスが水をかぶつたが幸い残っている。

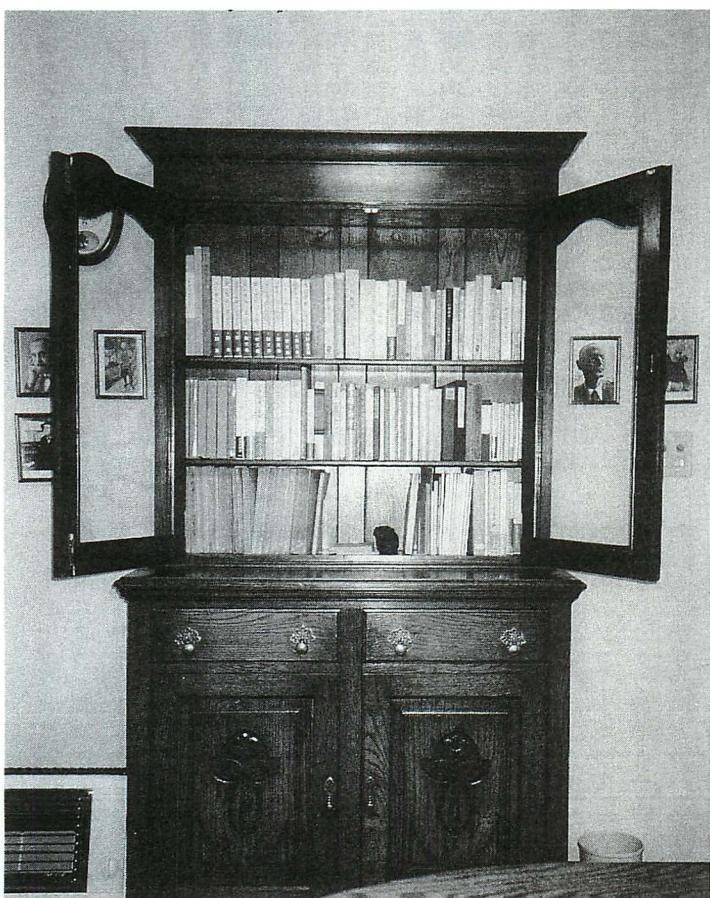
その他三宅修氏を始め数名の方から寄贈もさ
れている。喜八の撮った写真は殆んど風景で
ある。

焼失した書斎の持つ雰囲気には及びもつか
ないが、まだまだ未整理のものもあるので、
系統たつた方法で整備していくことがあとに
残つた者の仕事だと思っている。尾崎家に寄
せられた皆さん深いご厚情にお礼を申し上
げるとともに、皆さんと一緒に作りあげる事
が出来たものとして、大切に守っていきたいと
研究会以外の一般に公開するつもりはない
ので、尾崎喜八文庫という名称は研究会内の
呼び名と思つていただきたい。そして会員の
方々には研究会の本拠地と思つて気軽に来て
いただきたいが、ただ最後がかなりきつい登
り坂であることと、管理人は私一人なので事
前に電話の連絡をお願いしたい。

最後に愛蔵本のご寄贈、色紙・自筆原稿・
写真・重要コピー等のご寄贈、それに原稿・
写真等の火事でうけた損傷を修復して下さつ
た方々のお名前を銘記させていただきたいと
思う。五十音順、敬称は略させていただく。

朝比奈菊雄 家本福一 石川 翠
石田喜八 石田二三夫 石原康生
伊藤優雅璃 牛尾 孝 江本仙司
太田明夫 岡田朝雄 岡見 純
川崎精雄 川嶋恂子 北川太一
小林京子 権藤 司 齋藤十一
佐々木斐夫 佐藤敏恵 佐藤幸男

更科千恵 重本恵津子 島 正孝
杉本賢治 関口福二郎 関野禎子
竹鼻倭久子 田辺喜久 中埜栄三
中野陽子 中原好文 中山政市
名取正人 堀 隆雄 稲口美砂子
野本 元 町田 宏 前野一三
坂東照子 安川定男 松原道子
蛭田憲一郎 山本雅子 安田不二夫
安川定男 山本陽一 山川澄子
蛭田憲一郎 山本陽一 増田 博
安田不二夫 山川澄子
蛭田憲一郎 四ッ釜信一



カット 山室真二

インターネットのホームページ 「尾崎喜八の世界」札幌に開設

新しく会員になられた北海道札幌在住の森正光氏がインターネットのホームページの中にも尾崎喜八のページを設け、詩や散文を掲載したいので許可して欲しいと言つて来られたのは平成八年の夏のことであった。

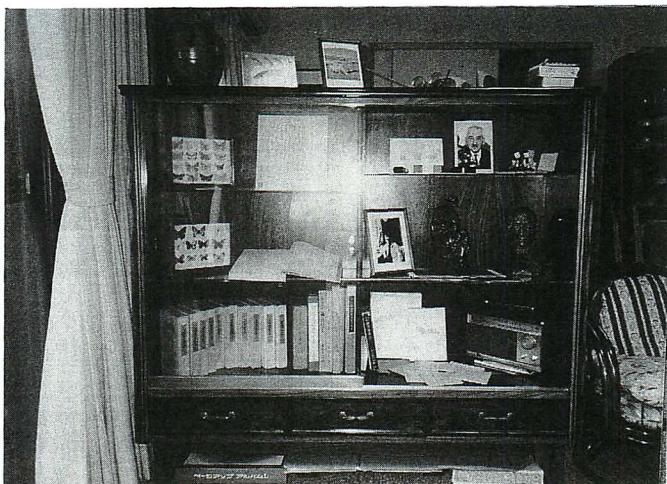
最初の詩は「田舎の夕暮」と「或る朝の思い」であった。九年の一月にあつた便りを森氏のお許しを得て原文のまま紹介しよう。

これまでインターネットで『北の自然と詩のハーモニー』というページの中に尾崎喜八のページを設けていましたが、今年一月から更に新しく『尾崎喜八の世界』と題して、尾崎喜八専門のホームページを作りました。内容的にはこれまでとあまり変わりなく、まだ充実しているとは言えませんが、将来的には音声なども付属できるページとなりましたので、長い目で見て下さい。インターネットの年令層は、今のところ四十代以前の若い人が多く、まだ少数の人にしかホームページを見てもらつていませんが、より多くの人に地道ながらも尾崎先生の作品を広めていきたいと思います。」

(「尾崎喜八の世界」) アドレス

<http://www.asahi-net.or.jp/~ip3m-nr/index.html>

森正光氏は昭和三十年生れ、現在札幌の病院勤務、専門は白血病・悪性リンパ腫等。



このホームページの反応の中に、『慰めの音楽』を愛読していたという四十代の男性、新潟大学で物理を学ぶ二十歳の女性からのメールが入った由、二十歳の女子大生は塾に通っていた頃、教材として詩「秋の流域」を読み、その詩が好きになり、是非掲載される書籍を読みたいと図書館、古書店巡りをされたが見付ける事が出来なかつた。最後の手段としてインターネットに挑戦、平成九年の春、森氏のホームページにアクセスする事が出来、大喜びをしたという事であつた。その後、森氏の誘いをうけ八月二十四日富士見の「高原のミュージアム」で行われた碑前の集いに出席された。

尾崎没後二十三年、尾崎喜八研究会が発足してからもすでに十三年が過ぎ、研究会の会員も我々もそれだけの歳月を経過してきたわけで、尾崎の世界を若い人々に知つてもらいたいと思つても、先の例を見ても分るようになつてきている。そんな中でインターネットを通じて若い人々に紹介できる事は大変頼もしく、喜ばしい事である。自分でもやつてみたいと思うのであるが、ワープロすら操れずにこの原稿も万年筆で書いている私には夢のまゝ夢であるらしいので、森氏を始めホームページをお持ちの方々のご助力をお願いするしかない。

尾崎喜八の愛用したオルガン

尾崎家には大正十三年の結婚当時から一台のオルガンがあつた。このオルガンの謂れを紹介しよう。

後に喜八の妻となる実子は十歳の時に母を亡くし、父で小説家・歌人であつた水野葉舟と三人の弟妹と、家事を管理してくれる病身の叔母を加えた六人家族で、現在の東京都品川区、東急大井町線の戸越公園付近に住んでいた。当時は畠、雜木林、竹林の多い全くの田園であつたそうだ。

ここで実子の境遇や生活環境については重本恵津子氏が著書として目下執筆中でいらっしゃるので省略するが、東洋英和女学校の先生をしていた叔母はクリスチヤンであつたので、近所の子供達を集めて自宅で日曜学校をひらいていた。実子が十二歳の頃（大正六年頃）この叔母のすすめでピアノを習わせてもらえていた。日曜学校での讃美歌の伴奏をする事になつた。日曜学校での讃美歌の伴奏を弾けるようになる爲であつたようだ。ところが家にはピアノもオルガンもないの、家での稽古は机の上で指遣いを学ぶことしか出来なかつた。父親の親友で時々この家を訪問された高村光太郎さんがそれをご覧になつて可哀相に思われたのか「みいちやんに小父さんのオルガンを上げよう」とおつしやつて下さつた。近所のお百姓さんに頼んで駒込の高村さんのお宅までオルガンを戴きに行つてもら

う事になつた。輸送の方法は牛車である。

朝出かけた牛車は暗くなつても中々帰つてこないので、就寝時間を特別に延ばしてもらつて待つていたそうである。両袖に燭台を載せる台のついた瀟洒なオルガンの到着した時の悦びは今も忘れる事が出来ないと実子は語つてくれる。

日曜学校の讃美歌の伴奏に弾かれたそのオルガンは実子の結婚と一緒に高井戸の新居に運ばれたのであつた。実子の宝物であり、唯一の財産であつたオルガンはそれ以後喜八の最も愛するものの一つになり、ずっと喜八の歌のお供をつとめてきたのである。尾崎家は歌を歌う事の好きな一家であつた。私が幼稚園の頃、草野心平さんとベートーヴェンの第九の合唱の練習をしたのもこのオルガンの周りでの事だつたし、沢山の方々が歌を歌わされたり、練習をさせられたりしたのだつた。喜八は最後の入院をする年までユニゾンでメロディーを弾きながら若々しいテノールでシユーベルトやヴォルフの歌曲、バッハのカンタータを歌つていた。

今年（平成九年）の春、「お宅にリードオルガンがおありとききましたが、拝見させていただきたいと思って伺いました」と訪れた方があつた。リードオルガンの研究家で『宮沢賢治の音楽』という著書もある佐藤泰平氏であった。火災で焼失してしまつた事をお話しし、オルガンについての謂れ等を実子と共に

お話しした。残つていた写真によりヤマハの製作で明治の末か大正の極く初期のものと分つた。その後幾度か佐藤氏と書簡や電話でのやりとりがあり、佐藤氏は大切にしていたものを焼失した実子の嘆きを慰めるために同型のオルガンを持参し、実子に見せ、弾かせたいと思つて下さつたのだつた。

たまたま佐藤氏のリードオルガン写真展が八月に銀座の教会でひらかれる事になつており、その展示品として青森県弘前の教会から同型のオルガンを借りてくるので、その機会に鎌倉まで持つてきて下さるという事になつた。実子が好んで歌つた讃美歌の番号や、喜八がよく弾きながら歌つた歌曲の問合せなどを解体したオルガンを乗用車に積んできてしまつた。実子と一人だけで聴かせていただくのは余りに勿体ないので、ウイークデイでも来られる二、三の方に連絡をした。

尾崎喜八文庫の部屋で組み立てられたオルガンは正面や側面に施された彫りも、両袖にとりつけられた燭台を置く台も何もかもかつて我が家にあつたオルガンにそつくりで奏でられる音も懐かしいあの音であつた。

佐藤氏はこのミニコンサートの為にプログラムを作成し、喜八がよく歌つていた歌曲、文章の中に出で来る曲を演奏しながらテノールで歌つて下さり、讃美歌は皆で唱和した。この心のこもつた贈物の一日、長く忘れられない感激と感謝の一日であつた。

ヘルマン・ヘッセと

尾崎喜八を結ぶ糸

尾崎実子・栄子両名が逗留していた信州富士見の家に、八月の末に年配の婦人が訪れた。茅野在住の小海瑞世さんという方であった。

小海さんは四十数年の昔、富士見村分水荘に住む尾崎喜八を慕つて度々訪れた当時の信濃乙女、女学生であつたのだ。「この辺りは先生のお好きな散策コースだとおっしゃつて、私も何度かお供していろいろの事を教えて戴きながら歩いたところです」、「是非お伝えしたい事があつて、今はどちらにお住いかと困惑していたところ、碑前の集いが二十四日に行われ、奥様が富士見に来ていられる事を新聞で知り、とんで来たのです」と言われる。

小海さんは今年の七月、ドイツ文学者新藤信氏に連れられて、スイス、モンタニヨーラのヘルマン・ヘッセ記念館のオープニングに参加されたのだそうである。兼てからヘッセの記念館を作るという話は耳にしていたが、生誕百二十年を機に完成したらしい。その記念館でヘッセの次男ハイナー・ヘッセに逢われ、長時間親しく話をする機会に恵まれた。その懇談の中で小海さんがヘッセの作品に接するようになつたきっかけは少女時代に出逢った尾崎喜八にヘッセの事をいろいろ教えて下されたのであるという事を話された所、ハイナー・ヘッセは、その人の事はよく知っている。父が大事に思っていた人だ。一寸待つて下

さい、と別室に行つて一冊の本を持つて来られた。それは『山の繪本』で「父はこの本を大切にしていた」と話されたそうである。

小海さんの記憶の描写によるとそれは昭和十七年に朋文堂から出た再版であつたようだ。

内扉の次に尾崎がヘッセから戴いた小さい水彩画が組まれ、その裏面はヘッセの署名尾崎宛の献詞が写し出されている——。小海さんはハイナー・ヘッセの言葉に涙がこぼれてしまつた、と言つては言つては言葉にならなかつた。父のヘッセに対する深い想い、ご子息にまで語られたヘッセの想いを結び合わせて、私達親子は小海さんが帰られたあとも感動と幸福を感じていていたのであつた。

メンネルコール広友会、高原での演奏会八月二十四日、富士見カルチャーセンターで広友会の演奏会があり、多田武彦作曲、尾崎喜八の詩による男声合唱組曲「秋の流域」を演奏。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い八月二十五日、富士見尾崎会主催で碑前の集いが行われ、各地から晩夏の高原に集う。

嘉納忠明氏が調査した新聞・雑誌掲載目録等を網羅した総目録が堀隆雄氏の手によって作られ、研究会に寄贈された。題名、書名、該當頁、出版社名、詩・隨想・散文・解説等の分類が題名の五十音順に並べられている五十行×百頁の目録である。堀氏はまだまだ不完全ですが……と言われるが、大仕事である。

蠟梅忌

二月一日、東京青山のNHK青山荘で行われる。小宮静雄氏のお話、蠟梅の「蠟」「臘」について。北川太一氏の尾崎喜八文庫を祝福する言葉。富士見町新任の教育長の挨拶等がある。司会は伊藤和明氏・堀隆雄氏。

メンネルコール広友会定期演奏会

二月二日、広友会は前出の組曲「秋の流域」を五反田ゆうばうとで歌う。組曲は「夏の最後の薔薇・雲・美ガ原熔岩台地・追分哀歌・

内に行われた。この日特に富士見分水荘の持主であった渡辺昭氏をお招きする。お話は三輪誠氏・伊藤海彦さんのこと。渡辺昭氏・分水荘の頃。川崎精雄氏・白菅会について。幹事役は川嶋利哉氏・伊藤和明氏。

第九回みずならの会

五月十日～十二日、群馬県多野郡万場町みかほ高原荘に宿泊。西御荷鉾、赤久縄山、オドケ山に登る。喜八文学碑の前で永友会の奥さん方の「おきり込み」をご馳走になる。三日目、中里村の恐竜の足跡とさざ波の化石を見る。世話人は堀隆雄氏。

五月十四日、富士見カルチャーセンターで喜八の詩による男声合唱組曲「秋の流域」を演奏。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い八月二十五日、富士見尾崎会主催で碑前の集いが行われ、各地から晩夏の高原に集う。

平成九年

蠟梅忌

二月一日、東京青山のNHK青山荘で行われる。小宮静雄氏のお話、蠟梅の「蠟」「臘」について。北川太一氏の尾崎喜八文庫を祝福する言葉。富士見町新任の教育長の挨拶等がある。司会は伊藤和明氏・堀隆雄氏。

メンネルコール広友会定期演奏会

二月二日、広友会は前出の組曲「秋の流域」を五反田ゆうばうとで歌う。組曲は「夏の最後の薔薇・雲・美ガ原熔岩台地・追分哀歌・

隼・秋の流域」の六曲。

第十回みずならの会

五月二十三日～二十五日、長野県軽井沢町星野温泉に宿泊。第一日目は白糸の滝と碓氷峠、

二日目は千ヶ滝、神津牧場、三日目は信濃追分の追分宿郷土館。ふた朝とも五時出発の探鳥会。声をきいた鳥は二十三種であつた。碓

氷峠と楽しみにしていた神津牧場は残念乍ら濃霧で何も見る事が出来なかつた。最終日は朝食後快晴となり、大浅間を満喫した。追分

宿郷土館は尾崎喜八の常設展示コーナーがあるところである。世話人石田二三夫氏。

「田舎のモーツアルト」碑の碑前祭

六月十四日、長野県南安曇郡穂高町、穂高中学校校庭で碑前祭が行われる。実子高齢の為

参加できず、研究会会員は各地から十名参加。重本恵津子さん、高原で尾崎喜八を語る。

八月十四日、蓼科高原三井の森のメモリアルホールで「詩人尾崎喜八を語る」を講演。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い

八月二十四日、長野県諏訪郡富士見町「高原のミュージアム」で碑前祭が行われた。昭和

五十五年に建立された碑であるが建立の段取りから始まって十八年間、毎年碑前の集いのお世話ををして下さっていた富士見尾崎会があつたが、皆さんお歳をとられたり、故人になられた方もあり、お一人お一人にかかる負担が次第に大きくなつたため、今回をもつて主催を富士見町教育委員会が肩代りし、尾崎会は協賛という形になるという事である。

本当に長い間晩夏の高原での楽しい行事を演

出して下さり、沢山の方々に楽しい思い出を残して下さつた。ご苦労をねぎらい心から感謝申し上げたい。今後の「集い」の発展を祈る。

実子夫人、夏の富士見を去る

十六年間、毎年夏休みを富士見町若宮で過してきたが、家の持主の都合で返さなくてはならなくなり、それに実子も富士見への往復が難儀になつたので、今夏を限りに引揚げることになつた。富士見に尾崎の記念施設をどういう産声はこの家で挙がつたのであつた。

編集後記

* 「尾崎喜八への旅」は伊藤海彦氏の逝去によつて残念乍ら完結を見る事が出来なくなつた。その後、伊藤氏が生前新聞・雑誌に掲載された尾崎に関する文章のコピーを、優雅

璃夫人からご寄贈いただいた。中には尾崎喜八を全く知らない人々を対象に、尾崎の世界を紹介した文もあるが、重複するものは避けた二、三回は補遺として転載させていただく事にした。今回の『高原暦日』の書評は伊藤氏二十三歳の作である。

* 本誌二十四頁、尾崎喜八落款印は、尾崎喜八文庫を訪ねてみえた会員の山本陽一氏が、展示してあつた落款印に眼をとめられ、印形について全く知識のない我々にいろいろ説明して下さつた。焼け跡から奇跡的に掘り出された印形について寄稿をお願いした。

* 会員の山室真二氏にカットを描いていただいた。山室氏は最初は余技として芋版で精巧な作品を作つていられたが、現在は消しご

ム版などで、植物・鳥・昆虫を主題とした作品でプロの仕事をしていられる。尾崎喜八の『行人句抄』(限定三十三部)や『鎌倉花信抄』文伊藤海彦・画山室真一(アトリエ風信刊)等がある。「みずならの会」参加記念カードを毎年製作していただいている。

* 現在購入可能な尾崎の著書
岩波文庫『山の絵本』七刷発行中。
『尾崎喜八詩文集』8「いたるところの歌」創文社に在庫少數あり。

『音楽への愛と感謝』音楽之友社刊、書店購入可。
『自註富士見高原詩集』鳥影社、電〇一六六一五三一九〇〇〇。

＊ 関連書籍の案内

『花咲ける孤独』評伝*尾崎喜八 重本恵津子著、潮出版社刊、書店購入可。
男声合唱組曲『櫻の樹の歌』メロス楽譜刊、作詞尾崎喜八、作曲多田武彦。(春の牧場・金峯山の思い出・故地の花・音楽的な夜・櫻の樹の歌)銀座・ヤマハ、渋谷・カワイ楽器にて購入可。

(尾崎栄子)

尾崎喜八資料・第十三号
一九九七年十一月一日発行・非売品
ISSN 0911-3339

発行 尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七一五一(平247)
電話 ○四六七一三一七六一

振替 00270-2-33012 尾崎喜八研究会
印刷 住友出版印刷株式会社